

2016年度

学士論文

抗議の現場はいかにして成り立っているか
—「金曜日官邸前抗議」のフィールドワーク調査—

慶應義塾大学総合政策学部4年

谷口 祐人

小熊英二研究会

目次

序章	4
0-1 研究テーマ	4
0-2 研究の背景	4
0-3 先行研究	5
0-4 研究の方法と対象	6
0-5 研究内容	7
0-6 本研究の限界と位置付け	9
第1章 舞台を作るー舞台監督の仕事ー	11
1-1 「実務集団」ー首都圏反原発連合ー	11
1-1-1 首都圏反原発連合とは？	11
1-1-2 主な担い手	12
1-2 演者のための舞台ー器としての官邸前・国会前ー	14
1-2-1 場を分かち規則	14
1-2-2 旗ではなく、主張に集まる	16
第2章 舞台上で踊るー織り上げられる様々な場ー	18
2-1 「展覧会の絵」～多様な表現のあり方～	18
2-2 「やりたい人がやりたいように」ー多様な表現のあり方ー	21
2-2-1 分化する場所の意味	21
2-2-2 意志が場所を作り、場所が役割を規定する	22
2-2-3 声から離れて声を上げる	23
2-2-4 自分が得意な方法で抗議する	25
2-3 舞台内舞台ー集団はどのように形成されているかー	26
2-3-2 担い手	27
2-3-3 きっかけ	28
2-3-6 BEでの役割	30

2-4	場所はどのように機能しているか-全体的な舞台の様相-	31
2-4-1	交流の諸相	31
2-4-2	「表現の場」「学びの場」「討議の場」「つながりの場」	32
2-5	リアリティの諸相-演者にとっての舞台の意味-	33
2-5-1	何に反対しているか?	33
2-5-1-1	原発それ自体への反対	33
2-5-1-2	“原発問題”を生み出す構造的な問題への不信	34
2-5-2	抗議を続ける意味	35
2-5-2-1	意思し続けること	35
2-5-2-2	来れない人の分まで	36
2-5-2-3	罪の意識	36
2-5-2-4	忘れないこと	38
2-5-2-5	未来を作るために	38
	終章	40
3-1	まとめと結論	40
3-2	今後の課題	41
	謝辞	42

0-1 研究テーマ

本研究は、官邸前・国会前で2012年より毎週金曜日に行なわれている脱原発を目指す市民運動のフィールドワーク調査をもとにいかにして抗議が行われている現場が成立しているのか、そしてその現場において人々は何を行い、何を考えているのかについて明らかにする研究である。

0-2 研究の背景

2011年に東日本大震災が起き、連動して福島第一原子力発電所の事故が起きた。放射能という誰にでも降りかかる脅威が人々を不安にさせた。次第に事故の全貌が明らかになっていくにつれ、「安全神話」のもとでおこわれてきた日本の原子力政策への不信、そしてそれを生み出した構造的な問題が人々に認識されるようになった。放射能というリスクに対する不安や政府や東京電力の対応は人々を納得させるものではなく、次第に各地でデモ活動が行われるようになる。原発事故それ自体は確かに一つの問題である。しかし、それに付随する政府や東電、マスコミの対応、そしてその裏にある構造的な問題までも“問題”とされた。

社会運動とは、ある事象を問題にするという側面を持っている。問題は、問題として認識されなければ“問題”とはならないのである。¹社会運動は、今までは問題とされていなかったことを“問題”にする、あるいは問題の位相を移し変えることを機能的要件の一つとしている。原発事故をきっかけに、今まで自明とされてきた「安全神話」やそれを維持し、再生産していた構造を明らかにした。従来から脱原発ないしは反原発運動を展開していた人々もいたが、原発事故を機に、“原発問題”が問題として告発され、広く共有された。放射能が自分や子どもに与える影響はどうなのだろうかというものから、「安全神話」を作り出してきた構造は自分の会社や身の回りの問題でもあったということまで、多くのことが問題とされるに至った。

原発をめぐる一連の“問題”は多くの人に広く認識され、2012年6月には主催者発表で10万を超える人々が官邸前や国会前に集まった。そして、この官邸前・国会前での脱原発を求める運動が現在（本稿執筆時、2017年）まで約5年間も定期的に続いている。また、現在では特定秘密保護法や安全保障関連法案、辺野古の基地の問題に「保育園落ちたの私だ」²に端を発する待機児童問題など、社会問題の提起と解決を求めるさまざまな運動が、この官邸前や国会前で行われるようになっていく。

このように3.11以後、多くの社会問題が直接抗議と呼ばれる方法で訴えられるようになった。そして、そうした3.11以後の運動の始まりは、脱原発・反原発運動なのである。その運動の担い手として注目されたのが、首都圏反原発連合であった。首都圏反原発連合は、「金曜日官邸前抗議」と呼ばれる抗議活動を始めたが、毎週同じ場で抗議を続けている。この抗議においては〈場所〉³という概念が強調されることが多い。

近年の社会運動は、エジプトにおけるタハリール広場の選挙や「オキュパイウォールストリート」、台湾や香港における社会運動においても、市民が場所を占拠するという行為が多く見られ

¹ 川北稔（2004）は、ラルフ・ネーダという弁護士によって、欠陥自動車の問題が告発されたことをきっかけに、「自己責任」とされていた自動車事故の企業責任を追求する運動が起きたことを例として、ある事象を“問題”として構築する社会運動の側面について論じている。

² 2016年2月15日に投稿された「保育園落ちた日本死ね」という題名のブログが話題を呼び、待機児童の問題が国会でも取り上げられるなど話題になった。
(<http://anond.hatelabo.jp/20160215171759> 2017/1/15閲覧)

³ 場所という概念を強調するために、以降筆者は人々の相互行為の蓄積によって成立している場所を〈場所〉と表記する。

る。五野井郁夫(2012)や香港の「雨傘革命」を分析した遠藤誉(2015)でもこの点は強調されている。運動の担い手や参加者も〈場所〉ということを強調している。しかしながら、その〈場所〉がどのように構成されているのか、その〈場所〉はどのような活動が行われているのか、活動に参加している人びとは〈場所〉にどのような意味づけをしているのかということについて実証的な研究はなされていない。そこで筆者は、この〈場所〉に注目することによって、現在の社会運動を論じる際の視座を豊かにしていくことに貢献したいと考えた。

0-3 先行研究

3.11以後の脱原発運動に関する先行研究は社会運動参加者の自由記述と編著者による分析を行った『原発を止める人々』(小熊 2013)や3.11以後の全国的な脱原発運動の調査を行った『脱原発をめざす市民活動』(町村・佐藤編 2016)、脱原発運動や反ヘイトスピーチから安全保障関連法案の反対運動までを扱った『路上の身体・ネットの情動』(田村 2016)などが挙げられる。小熊(2013)では、2013年までの運動の台頭と変遷を通史的に描いた上で、日本や国際的な社会背景や参加者の属性などの分析、そして選挙と脱原発票の関係などを分析している。町村、佐藤(2016)では原発やエネルギー問題とそれをめぐる社会運動史を踏まえた上で、3.11以後の脱原発の市民運動の全国的な広がりを計量的に調査し、その結果をもとに3.11以後の運動の意味づけをする。田村(2016)では、参加者の聞き取りやツイッターの分析から参加者がどのような「物語」を持って運動に参加しているのかを明らかにしている。

社会運動研究自体には大きく分けて二つの潮流がある。アメリカの潮流とヨーロッパの潮流である。(ニック・クロスリー 2002=2009)⁴

アメリカの潮流は、行為者の問題をメインで扱い、ヨーロッパの潮流は構造的な問題をメインで扱うといってもよい。アメリカの社会運動の研究は、シカゴ学派の都市研究やハーバート・ブルーマーのシンボリック作用論などに端を発する。アメリカにおける社会運動の理論は集合行為論として知られるが、その代表的な論はM.オルソン(1965=1996)やニール・スメルサー(1962=73)によるものである。彼らは、社会運動というよりはむしろ集合行為一般について論じたが、彼らの集合行為論は社会運動論にも影響を与えた。彼らは集合行為を、「不満」や「アノミー」、「構造的ストレイン」などの概念を駆使して論じた。しかしながら、社会運動の発生の起源を「不満」などに求める潮流は、行為者を非合理的な存在と捉える方向へと向かいがちであることが批判され、資源動員論や合理的選択論といった理論が提唱された。これらの理論は社会運動を、非合理的な感情から考察するのではなく、目的達成のためにどのような資源が動員できるのかという目的合理性の観点から見るべきであるとした。代表的な論は、マッカーシー＝ゾールド(1977=1989)によるものである。彼らは資源動員論と従来の集合行為論を3つのパースペクティブから対比している。そのパースペクティブとは、支持基盤、戦略と戦術、より広範囲な社会との関係、の3つである。支持基盤については、従来の理論が不平を持った人びとを中心的に扱うのに対して、資源動員論では、不平以外の要素(資金、便益、良心など)で社会運動が起こされることを強調する。戦略と戦術については、従来の理論が暴力や取引など相手当局との関係においてのみ考察してきたのを、資源動員論ではシンパの獲得や相手を変化させることなどについても関心を寄せるといえる。さらに、広範囲な社会との関係については、従来の理論が運動が環境に

⁴ 先行研究の整理に関しては、クロスリー(2002=2009)を主に参考にしたが、長谷川公一(1985)、富永京子(2016)、『社会運動の社会学』(2004:1-11)、Alice Msttoni(2014)も参考とした。社会運動の理論研究は、欧米圏をメインにかなりの蓄積があるため、ここではその全てを扱うことはできない。そのため、本研究における先行研究のまとめは、クロスリーによる図式的な整理を基礎としたが、社会運動論が同時代の学問の理論や同時代の社会現象に大きく規定されていることは指摘しておく必要があるだろう。

規定されることを中心的に描いたが、資源動員論では環境を利用することも扱うと述べている。クロスリー（同上）はこのアプローチが集合行為論に含まれていた方法的な利点（参加者のアイデンティティの問題など）を隠すことになったと批判する。しかしながら、アメリカの研究は行為者を中心とする分析であることは強調できる点である。

一方、ヨーロッパの社会運動の研究は、マルクス主義の文脈の中にある。ヨーロッパにおいて社会運動といえば、労働運動であり、それは社会の階級構造から生じるものであった。つまりはブルジョワジーとプロレタリアートの闘争である。それが、1960年代になると中間層の増加により、比較的安定した政治体制がつくられるとともに、その安定した政治体制から疎外される存在は労働者からマイノリティーへとうつっていった。それは、例えば、女性であり、エスニックマイノリティーや移民であり、ゲイやレズビアンである。社会の分断はブルジョワジーとプロレタリアートではなく、マジョリティとマイノリティに見られるようになり、マイノリティの権利拡大運動を「新しい社会運動」として位置付けた。ただし「新しい社会運動」は論者によって意味づけに多少のズレがある。また、日本においては3.11以後の運動を「新しい社会運動」と呼ぶ場合もある。「新しい社会運動」は「家族的類似性」をもってしか語ることはできないが、簡潔にまとめるならば、「資本家-労働者の問題に関わらず近代システムの進展とともに明らかになっていった諸々の問題（アイデンティティ、国家の正統性、環境問題など）に対する異議申し立て」とみなすことができるだろう。ただし、ヨーロッパにおける代表的な研究は、「社会のどこに分断があるのか」という構造的な問いを背景にしていることが多い。

代表的な論者は、メルッチ（1989=1997）、トゥレーヌ（1978=83）、ハーバマス（1981=1985）などである。また、ウルリッヒ・ベックの「リスク社会論」（1986=1998）の観点から運動を見る動きもある。

近年では、アメリカ流の行為者理論とヨーロッパ流の構造分析を組み合わせることでより総体的に運動を考察しようという試みもなされている。クロスリー（同上）は、ピエール・ブルデュエの界-chmpとハビトゥスの概念を用いることで、より総体的な運動の考察が可能だと述べている。また、近年ではケヴィン・マクドナルドによって、「経験運動」という枠組みも提示されている。（濱西 2016）「経験運動」は、従来の社会運動論が集団組織による行為を運動の担い手と想定しているところに限界があるとする。しかし、現代の運動は集合的アイデンティティを共有する集団組織によっては担われていないと分析する。現代の運動は、「活動形態、身体・空間的経験、他者との関係においても融合や一体化」（濱西 2016:47 一部改変）は見られないのである。この特徴は、官邸前・国会前における運動にも見られる特徴である。しかしここで、集合的アイデンティティを共有しない個々人の集まりが、なぜ社会運動のような集合的活動を行いうるのか、それを可能にするものは何かという問いが提出される。

0-4 研究の方法と対象

先行研究を整理した上で本論では、「経験運動」の枠組み従い、「集合的アイデンティティを共有しない人びとがどのような相互行為を行うことによって集合的活動をなしているのか」という大きな問いを共有しつつ、〈場所〉の形成に注目することで、人びとの集合的な行為の諸相を明らかにしていくことにする。非構造化インタビューや半構造化インタビュー、長期にわたるフィールドワークを行うことで人々がどのように〈場所〉を作り上げ、その〈場所〉でどのような行為を行い、そしてその〈場所〉にどのような意味を与えているのかということ明らかにしていく。出会いの場面について、人びとがともにある時に、どのように秩序を形成するのかという研究を行ったゴフマンの研究もまた参考になった。非構造化インタビューや半構造化インタビュー、

参与観察はそのような問いを明らかにするのに適した方法である。その有効性については、Kathleen M. Blee and Verta Taylor(2002)によっても明らかにされている。

インタビュー内容としては、活動の参加時期、活動の参加のきっかけ、政治的な関心、活動の経験、住んでいる地域、家族構成、家族の理解、グループで活動している場合はなぜそのグループに加わったか、どうしてこのエリア⁵にいるのか、“原発問題”に関して何に一番関心を寄せているか、参加者との交流はあるか、職業はないか、抗議を続けることをどう思っているかなどである。インフォーマントへのインタビューで上記の全ての事項を聞いてはいない。また、録音もおこなったものもあるが、基本的にシュプレヒコールなどの音が大きく、十分に録音できていないものが多かったため、聞き取りの内容はメモ書きで記録したものがほとんどである。そのため、文章中に「参加者の声」としてインフォーマントの語った内容をいくつか引用しているが、完全な再現とはなっていないことをここで断っておく。

2016年には4年目を迎えた金曜日の官邸前・国会前における脱原発をめざすデモ活動。4年間も続けて抗議が“同じ場”で毎週という頻繁な頻度で行われるデモ行動は世界的にも珍しい。そうした社会運動が“生まれ”“続けている”〈場所〉がどのように成立しているのかについて明らかにした研究は3.11以後の脱原発・反原発運動を扱った研究では存在しない。この点を明らかにしていくのが本研究の主旨である。

研究対象は、官邸前・国会前で毎週金曜日に行なわれている脱原発運動に限る。官邸前・国会前という空間では、脱原発運動以外にも行われることがある。辺野古の基地問題や安全保障関連法案、特定秘密保護法案に関する反対運動、そして待機児童の問題などである。本研究では、あくまで毎週金曜日に行なわれている活動に注目することで、ミクロな視点から質的な調査を行い、未だに経験的な先行研究では十分考察されていない市民運動のあり方を明らかにしていく。

0-5 研究内容

官邸前・国会前は、官公庁であり、周囲にはコンビニもない。街行く人も官公庁に関係のある人々だけである。こう言うことが許されるならば、そこは殺風景なのだ。昼であれば、観光をする人が来たり、憲政会館を散歩したりする人がいるかもしれない。しかし、夜になると官邸前・国会前周辺から生活者の姿は消える。このような官邸前・国会前だが、毎週金曜日になるとこの場所がさながらライブ会場かのように騒がしくなる。シュプレヒコール、スピーチ、念仏、歌、楽器の音、キャンドルの灯り。殺風景な景色に風景ができる。茫漠たる空間に場が立ち現れる。これが金曜官邸前・国会前抗議である。

本研究で明らかにするのは、空間が人々の相互行為の蓄積によって意味を持った場所になる様子である。いわばデモの現場が形成され、維持される様子である。イーファー・トゥアンは以下のように述べる。⁶

「空間」は、「場所」よりも抽象性を帯びている。最初は、まだ不分明な空間は、われわれが

⁵ 後述するが、官邸前・国会前における脱原発・反原発運動にはいくつか機能的に異なる意味を持ったエリアが存在する。

⁶ 空間と場所の関係については、例えばエドワード・レルフ(1976=1999)も参照。レルフやトゥアンの哲学的基礎は現象学であり、彼らは場所を「生きられた世界」として捉える点で共通する。本研究では、詳細な議論は行わないが、彼らは地理学者であり、人間と環境(建造物や景観)の関係に主な焦点を当てる。本研究でも、現象学的な立場は同じとしつつも、人間と人間の相互関係が実際に営まれかつ、その内部で活動する人々に意味を提供する装置として場所という概念を用いている。

それをもっとよく知り、それに価値をあたえていくにつれて次第に場所になっていく。(トゥアン 1977=1988:17)

人々は空間の中に暮らしている。その空間の中で、様々な行為を行なっていくことで、その空間に意味を与えていく。その行為とは、実際に空間を作り変えていくという実践的な行為から、その空間について何を語るかといった思弁的・言説的な行為まで含まれる。その中で意味を作り出し、その作られた意味の中で人々はさらに実践行為を営んでいく。意味を作り出し、その作られた意味の中で生き、さらにまた意味を作っていくというサイクルの中で空間-場所-社会は作られていく。

ここでは、空間-spaceを意味が実際に作られていく前の、いわば器のような存在と捉える。場所-placeを人々が意味を作り出し、その意味の中を生き、さらにまた意味を作り出しというサイクルの中で生み出された存在と捉える。ある人にとっては空間でしかない存在が、ある人にとっては場所として捉えられるということもありうる。それは、その人個人の意味づけの問題なのだ。

官邸前・国会前は、2012年以降に抗議をする場所としての意味を持つようになった。脱原発運動によって抗議する場所としての意味を持った官邸前・国会前は、それ以降も例えば、安全保障関連法案・保育園問題・辺野古基地問題など様々なイシューにおいて抗議する場所としての機能を果たすようになった。

前述のように、国会前・官邸前というのはコンビニもないようなそれ自体としては茫漠たる空間であった。(政治家や官僚たちにとってはそこは仕事をする場所であったにせよ。)それが2012年以降は、抗議する場所として機能し始めたのだ。

繰り返しになるが、本研究は、特に金曜日に行われている官邸前・国会前における脱原発運動の現場において、どのようにして〈場所〉が成立しており。人々はどのようにその〈場所〉を捉えているのかについて明らかにすることが目標である。そこで、本研究で扱うのは主に2点である。

1つは、主催者(反原連)がいかにして官邸前・国会前を抗議の場所として作っているかである。つまりは、そこで人々が各々の役割を演じられるような舞台装置をどのように作り上げているかである。反原連は抗議に際して様々な注意事項や規則を設けている。このように空間にある一定の意味において切り取ることで、空間の秩序化を図っているのである。もし、空間にそのような制限がかかれば、空間において繰り返される行為は無秩序となり、結局は意味を失ってしまう。

舞台は、客席から隔離されていて舞台になる。その上で演者は演技を行うのである。客席と舞台の境界がなければ、もはやそれは舞台とは言えないだろう。また演技も成り立たないだろう。こうして、官邸前・国会前は抗議時間中は、反原発を主張する〈場所〉として舞台が出来上がるのだ。その舞台において、参加者はそれぞれ独自の方法で抗議をしていくのである。

2つ目はまさにこのことについて扱う。つまり、主催者が作り上げた舞台上でどのように参加者は行為をしているのか、そしてその舞台にどのような象徴的な意味を付与しているのかである。この舞台上では様々な行為が見受けられる。シュプレヒコール、念仏、ビラ配り、歌、絵、署名運動、太鼓、立て看板、キャンドル、スピーチ、自転車で一周など様々な行為-役割が見受けられる。彼ら/彼女らはどうしてそのような行為をしているのか、そして作り上げられた舞台をどう解釈しているのか、あるいはどのように作り変えていっているのかを明らかにする。ここでは、人々の相互行為(人と人、人と場所)の諸相が明らかになっていく。この相互行為こそが空間に意味を付与していく活動に他ならない。反原連はあくまでも行為の水路付けであり、それは自覚してなされていることであるが、行為を実際に担っている人々は何をしており、どう思っているのかを明らかにしていく。

まとめると、第1に主催者である反原連がどのように空間にどのような制限や意味づけを与えることで官邸前・国会前を〈場所〉として作り上げているか、そしてその〈場所〉で参加者はどのような行動し、その〈場所〉にどのような意味を与え、意味世界を生きているのかを明らかにしていく。

0-6 本研究の限界と位置付け

本研究は限界によって特徴づけられていると言ってもいいほどである。本研究は、官邸前・国会前に来ている“全て”の人に話を聞いているわけでもないし、“全て”の場を満遍なく見渡してもいない。フィールドワークゆえに研究者は観察者としても振舞うがまた自らも参加者として〈場所〉に入り込み、〈場所〉を作り上げている。その意味では観察者であり実践者であることを宿命づけられている。そのために、外部の視点から“全て”を見通すことは不可能である。社会の内部において、社会を観察しなければならないという決定的な限界の中で本研究は行われている。そのため、論じていない人、論じていない行為、論じていない出来事など、様々な論じていないことがある。しかしながら、その限界はこの運動の別の側面に光をあてる。それは、研究者が研究をしていて感じたことでもあるが、この〈場所〉の多様性と複雑性である。行っている活動も多様であり、新たな試みが生まれたり、退出したりする。常にこの活動は“運動”しており、変化している。人々の活動も多様であれば、自らの行為への意味づけもまた多様である。本章で明らかにしていくように、自らが作り上げた来た〈場所〉に対して付与している意味、あるいは抗議をしている意味もまた多様である。

こうした多様性は現代社会における運動を象徴していると言ってしまうと、牽強付会なのかもしれないが、図式的あるいは典型的に捉えることは一方では可能であっても、そこからこぼれ落ちていくものばかりである。研究者自身、研究者の見たことや聞き取ったことがどの程度の代表性があるのかに関しては疑いを持っている。しかし、本研究に意味があるのだとすれば、人々が空間を改変して、固有の意味を持った〈場所〉に作り上げていくことはどういうことなのか、そのダイナミズムの一端を垣間見れるだろうということである。

近年の社会運動は、「空間の占拠」という行動を伴うことがある。香港や台湾でのデモやアラブの春、あるいはウォールストリートでのデモ運動。それらは、国会や金融街など象徴的な場所を占拠し、その意味を書き換えようとしている。肥大化しすぎてしまって、意味を失っていく空間（もちろん一部の人にとっては意味のある場所である）を占拠して、そこに新たな意味を付与していく。自らの声が反映されない、つまり代表性を失った人々が代表性を象徴している場で声を上げる。これが近年の社会運動に特徴的な要素の一つだとみなすことが許されるならば⁷、本研究もまたそうした文脈にも位置付けられるであろう。

また、「経験運動」として特徴付けられている近年の社会運動だが、それは日本の社会運動においても妥当するのか、また妥当するならば、その実態はどうのようになっているのかということをも明らかにした研究としても位置付けることができる。

本研究は限界によって特徴付けられているものの、それが意味では現代社会を特徴付けるものでもあること、そして現代社会における社会運動において〈場所〉という問題が重要になってきていること、その点に対して本研究はアプローチしているものであることが理解され、今後の研究の一助となれば幸いである。

⁷ こうした議論はデイヴィッド・ハーヴェイ（2012=2013）やルシアン・フェーブル（1968=2011）において議論されていることも重なる。彼らの場合は、都市化=資本化に対する抵抗という形で都市の運動を捉えるが、人びとが抵抗するのはそうした潮流から「疎外」されるからであるという点は、政治的な意思決定から「疎外」されていることに反対するために権利を要求するということと同一平面上の問題である

一方で、構想はしているが本研究では論じきれないこともある。これは時間的な制約からの限界だが、本研究では場所をつくりあげている人々の行為やその場所をどのように捉えているかという点を取り扱っているが、それを政治、マスメディア、論壇などの外部集団がどのように捉えたのか、また運動がどのような影響を与えているのか、そして外部と運動内部の相互作用はどのようなものであるか、そして場所を離れてはどのような活動を行なっているか、場所を超えた日常生活の実践はどうであるかなどは論じていない。あくまでも本研究は、〈場所〉の内部での行為しか論じていない。本研究の限界はこの点にあるが、この点に関しては修士論文で扱う予定である。

本章では、主に官邸前・国会前という空間を、抗議する場所として組み替えてきた反原連の担い手の特徴などを扱った後に、反原連が実際にどのような〈場所〉として官邸前・国会前を構築してきたのかについて記述していく。

福島第一原発の事故が起きてすぐ、人々は街頭に出た。福島第一原発の事故に対応にもたつく、政府と東京電力に不信を抱いたからである。長らく日本では大きなデモはない、すなわち「デモのない国」だと言われてきた。60年の安保闘争、そして68年の学生運動の終焉、74年のベ平連の解散以降に、日本社会において大規模なデモは起こらないとされた。いわば日本において大衆的なデモは「谷間の時代」に入ったが、谷間の時代においても社会運動と呼ばれるものに携わっている人びとももちろんいた。

福島第一原発の事故をきっかけとする運動を担った人々の中には従来の運動の担い手もいた。3.11以降の運動は彼ら/彼女らの予想を超えた大規模なものとなっていった。本章では、まず担い手がどのような人であったかを素描する。

「谷間の時代」の担い手が驚いたように、大規模化したデモは、多様な層を引き込んでいき、まさに大衆的なデモとして見なされるようになった。

60年代、70年代における運動の反省や「谷間の時代」において培った技術を基にしたながら、大衆を巻き込んでいくことになったが、そこでは、「思想的な対立で分裂しない」、「参加しやすいデモ」、「党派性を出さない」という基本方針のもとでデモが運営された。官邸前・国会前における脱原発運動もまた同様であり、その運動を運営している。反原連も自らのことを「実務集団」と名乗り、官邸前・国会前を「器」や「篝火」などと評している。⁸

本章が第二に扱うのは、この点である。つまり、主催者である反原連がどのような方針にもとづいて、官邸前・国会前という場所を成立させ、運営しているのかという問題である。

1-1 「実務集団」-首都圏反原発連合-

この節では官邸前・国会前を空間から場所へと変えた首都圏反原発連合の担い手について素描する。

1-1-1 首都圏反原発連合とは？

首都圏反原発連合（反原連）はその名前の通り、反原発あるいは脱原発を目指す小グループが連合してできたネットワークであった。そのグループは結成当初で13ほどで、それぞれがデモを主催していた。⁹各々のグループの主催しているデモへ行くうちに繋がりができ、「それぞれ別個のデモだけではなく、力を合わせて大ききアクションをしたい」¹⁰という思いが一致して、小グループが連合して、首都圏反原発連合が誕生した。そのため当初、反原連は自らのことをグループではなく、ネットワーク組織だと称していた。（ミサオ 2016:4）現在は、首都圏反原発連合に参加して

⁸ 「実務集団」については、野間(2012)p. 18、「器」や「篝火」という表現については、例えば小熊、ミサオ、奥田の『現代思想 2016年 3月号』の対談におけるミサオの発言 (p. 35) や同上 p. 63から掲載されている服部 (2016)、野間(2012)を参照

⁹ 現在は11グループとなっている。内訳は、I Act 311 Japan II 安心安全な未来をこどもたちにオーケストラ III 「怒りのドラムデモ」実行委員会 IV エネルギーシフトパレード V くにたちデモンストレーションやろう会 VI 脱原発杉並 VII たんぼぼ舎 VIII TwitNoNukes IX NO NUKES MORE HEARTS X 野菜にも一言いわせて！原発さよならデモ XI LOFT PROJECT

¹⁰ ミサオ(2016)p. 4 他に田村(2016)p. 30も参照のこと

いた小グループが独自の活動から反原連の活動へとシフトしていったことから、ネットワークからグループとして自らをアイデンティファイしている。¹¹

コアメンバーは20人ほどで、大規模なデモをするときなどは、コアメンバーの知り合いがアシスタントスタッフとして参加する。アシスタントスタッフはコアメンバーの全員と面識があるわけでもなく、アシスタントスタッフ同士での面識も必ずしもあるわけでもないというようなゆるいつながりとなっている。

また反原連は事務所を所有しておらず¹²、当日に現地で集合し、機材の設営などを行う。トラメガなどはLOFT PROJECTから提供を受けている。運営資金は、カンパや物品販売などで賄われており、収支報告書もHP上で公開している。彼ら/彼女らの官邸前・国会前における仕事は、ランジットメガホンを配置する、司会進行をする、コールの先導をする、SNSなどで抗議の様子を配信する、人の誘導をする、物品販売を行うなどであり、反原連のコアメンバーが積極的にスピーチをすることも稀である。抗議終了後は、反省会を行うが、そこで話し合われるのも、警察の対応や会場の設営方法、人の誘導の仕方やいかに効果的なデモを行うかなど実務的な話だという。思想信条に関する議題はない。あくまでも実務に徹底する「実務集団」なのである。原発事故というのは、ウルリヒ・ベックが『危険社会』(1986=1998)で述べているように、思想信条や階層に関わらずあらゆる人に降りかかりうるリスクである。その意味では、脱原発あるいは反原発運動というのは、思想信条にかかわらずあらゆる人に開かれたものである方が合理的である。

1-1-2主な担い手

担い手に関しては、小熊(2016)でも論じられているが、3.11以前から原発問題や環境問題に取り組んでいたグループと3.11以後に新たに作られたグループが合流して反原連はつくられた。¹³ 3.11以前から活動していたグループとしては、たんぼぼ舎やNO NUKES MORE HEARTSがあげられる。またエネルギーシフトパレードの呼びかけ人はもともと環境運動に取り組んでいた人々である。他の団体は3.11以後に設立されたが、例えば「怒りのドラム」実行委員会(通称「ドラム隊」)は、3.11以前にデモなどで活動したグループが発展してできたものである。「野菜にも一言いわせて! 原発さよならデモ」はアジア太平洋資料センターの勉強会で知り合った人々で結成された。¹⁴ また杉並や国立など中央線沿線地域は社会運動が、活発な地域であった。(原 2012)

このように、原発問題には直接関わってなくても環境運動や原発問題以外のデモに参加していたグループが、3.11をきっかけに原発問題にも関わるようになって、反原連へと発展して行く。

¹¹ <http://coalitionagainstnukes.jp/?p=5853> 2016/12/14閲覧

¹² 事務所を借りるという議論もあったようだが、「事務所を借りるなんてとんでもない」という意見もあり、現在でも事務所はない。そこには、運動に専従しているわけでないという組織化・制度化を避けようとする姿勢がみられる。田村(2016)p. 40
その一方で、ミサオは『現代思想 2016年 3月号』の対談の中で、「それ(運動)を支える柱となる人間が兼業では難しい。運動のなかで生活の費用を賄えるグループや組織が多くできれば、より運動の基盤が強化され、できうることの可能性も拡がると思います。」p. 50と述べている。実際に、運営資金の中からメンバーへの手当てを行なっている。そしてそのことは運動を続けて上では重要なことだと述べているが、4年間も運動を続ける上ではそのような組織化・制度化も必要であることがうかがえる。近年の社会運動の担い手の特徴は組織ではなく、ネットワークだと言われているが、一方で活動の継続には組織化も必要だということがわかる。しかし、その組織のありかたについては従来型の組織とは異なる点があると予測される。

¹³ グループの内訳については、注8を参照のこと。

¹⁴ 詳細は、野間(2012)pp. 180-184も参照のこと。

また、佐藤ら(2016)の調査によれば、調査に回答した団体の3分の1が震災後に結成された団体だという。反原連に関していえば、震災後に結成されたグループが多いが、それ以前から活動していたグループが3.11をきっかけに原発問題にも取り組むということも見られるため、3.11以前か以後に活動したかということでグループ分けをすることは常に曖昧さを残してしまう。また、震災後に結成したグループは震災前に結成されたグループに比べて、事務所を持たない緩い個人のゆるいネットワークである場合が多く、その緩いネットワークは質問票による調査によって補足することが困難である。佐藤(2016)の調査においても、震災後に結成されたほとんどのグループが任意団体とされている。それに比べて震災前に結成されたグループは任意団体が半数ほどで、法人格を持ったグループや組合が半数を占める。小熊(2016)も述べるように、震災後に結成されたグループを統計的に捕捉することは困難である上に、統計上の数値が実態を表すかは不明確である。担い手のグループの性格は以上のことから明らかになるのではないだろうか。つまり、十分に組織化されているわけではなく、むしろ今までの個人的な繋がりや活動をきっかけにできたネットワークを中心に、原発運動も展開していくということである。そうした新たにできたネットワークと、従来から活動していた団体が連合したのが、反原連である。従来から運動に携わってきた人々と新たに運動に関わるようになった人々繋がったのである。そのことが、運動にダイナミズムをもたらしたといえよう。昔から関わっていた人々は知識の蓄積もあり、その知識は新たに運動に関わった人にも継承されていく。そして、そこで得た知識-情報を周りに広めていくことで、広範な人に知識-情報が行き渡る。そのことは運動に新たな人々を巻き込んでいくのである。金(2016)も述べるように、「震災後の市民活動は、震災前から日本社会全体に疑問をもって活動していた既存団体のすばやい対応によって後押しされた」(町村・佐藤 2016:90)のである。

反原連は現在ではグループとアイデンティファイするようになったことは前述の通りで、半ば専門的に活動するコアメンバーも増えたというが、未だに事務所は持っておらず、会員制などで組織を維持するという試みもとっていない。また、官邸前・国会前で形成されている小グループもほとんどは、仲間内だけでやっており、統計上は現れてこないであろうが、脱原発・反原発運動に取り組んでいるグループである。そのため、統計以上に3.11以後に結成された団体は多いのではないかとこの可能性もあるがその全貌を把握することは不可能に近いだろう。反原連の性格はここで明らかになっただろう。

次にそのグループを担っている人々の性格を記述していく。金曜日の官邸前・国会前の抗議活動が、18:30~20:00まで行われていることを考えてみても、企業の勤め人が担い手となることは難しい。またデモの主催となると準備などもあるためになお一層企業の勤め人では難しい。そのため、時間に融通をきかせられる人が多い。小熊(2016)では、「認知的プレカリアート」¹⁵を担い手の主要な特徴としてあげている。¹⁶

確かに、反原連を構成するメンバーはイラストレーターやデザイナー、音楽・芸術関係といった仕事や自営業者が多い。また、従来から脱原発・反原発を目指す運動をを組織として行っていた。人々はその延長として反原連で活動している。学歴も高く、専門性を持ってはいるが大企業などの

¹⁵ Negri and Hardt(2012)p.55に“cognitive precariat”とある。Negri and Hardtは、その説明として、学生や知識労働者(intellectual workers)、都市のサービス業従事者であると述べている。

¹⁶ 小熊(2016)では、小熊(2013)の調査がもとになっているが、小熊(2013)の調査では、回答数が55名であることやその55名をもって3.11以後の運動の中核的な担い手像を構成し、かつ一般参加者に関しては、東京新聞の調査をもとにするなど、中核的な担い手と一般的な担い手の区別の基準が不明瞭かつ異なる手法をもって中核的な担い手と一般参加者の区別と特徴を求めるのは不十分であると指摘しておく必要がある。しかしながら、それを反原連に限定するのであれば、「認知的プレカリアート」という枠組みは妥当性をもつと考える。

組織に属しておらず、日本社会では周縁的な存在と呼ばれてきた人々が中心となっている。彼ら/彼女らは、組織に属していない分、自らの周りの世界を自ら作り上げていかなければならないような仕事をしてきた。一から自ら考えて作品を生み出すことやイベントの設計を考えることから会社を立ちあげることまで、彼ら/彼女らの蓄積されたノウハウは、その後の官邸前・国会前を「ブリコラージュ」（レヴィ＝ストロース 1962=1976）的¹⁷に抗議のための〈場所〉として作り上げていく上では、少なからず影響を与えたであろう。

1-2 演者のための舞台 -器としての官邸前・国会前-

反原連が会議で議論することなどは、場をいかにして運営していくかであり、原発問題に関する突っ込んだ議論はしないという。これは、従来の運動がセクト化していったことで求心力を失っていった反省からであるが、反原連は「実務集団」として自らを位置付けている。そこで、反原連がどのような役割分担をして、どのように場を維持しているのかについて明らかにする。

反原連の「実務集団」的な側面は、官邸前・国会前を参加者が抗議するための「器」だと称していることに象徴される。しかしながら、あまりにも場所の意味が多様であれば、それはもはや場所とは言えなくなってしまう。意味が多すぎることもまた意味がないことと同じなのである。そこで、「器」を「器」足らしめるには、一定の区切りが必要である。規則などがそれだ。舞台を舞台として際立たせるには、客席との区切りが必要なのも同様である。ゴフマンは以下のように述べる。

広域コミュニケーションの可能性とそれを規制するルールこそが、単なる物理的な場所を、社会的に意味のあるものに変えるのである。しかし、このような共通条件以外にも、特定のかかわりのメンバーとして認められた人々は、さらに、焦点の定まった相互作用をいとなむのである。（ゴフマン1963=1980:163）

そこで、本節では反原連がどのように舞台を舞台として成立させているのかに着目する。つまり、ここでは、舞台を舞台として成り立たせるルールを考察の中心に据える。ゴフマンも述べるようにその規則こそが「物理的な場所」（官邸前・国会前という空間）を「社会的に意味のあるもの」に変えるのである。その舞台を基盤として参加者は各々の活動をしていくのである。

1-2-1 場を分かち規則

反原連のホームページ上では、官邸前抗議に参加するにあたって以下の注意事項を上げている。¹⁸

※反原発・脱原発というテーマと関係のない特定の政治的テーマに関する旗やのぼり、プラカード等をご遠慮ください。詳しくはこちら→<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=789>

※抗議時間中、財務省上にインフォコーナーを設け、反原連や反原発関連のフライヤーは、こちらにまとめて置くことにしております。参加者の方が抗議に集中できるようチラシ配布、カンパ集め、署名等、抗議時間内はご遠慮ください。

¹⁷ あり合わせの材料で場を豊かにしていくというのは、官邸前・国会前ではよく見られ、それがデザイナーや映像や音楽に関わる仕事をしている人びとによって担われていることは、この運動の特徴の一つとしてあげられるため、ここではブリコラージュという言葉を用いた。

¹⁸ この注意事項は抗議が始まる前にもアナウンスされる。

※この首相官邸前抗議は、あくまで非暴力直接行動として呼びかけられたものです。その趣旨を十分にご理解頂きご参加いただきますよう、宜しくお願い致します。

※その他、基本的に主催者の指示に従っていただきますようあらかじめご了承お願いいたします。

※スピーチに関しましては以下のご協力をお願いいたします。

一人あたり「官邸前抗議エリア」では「1分以内」、「国会前スピーチエリア」では「3分以内」でお願いします。

反原発・脱原発テーマに関係のないテーマでのスピーチはご遠慮ください。

特定の団体のアピールにつながるスピーチはご遠慮ください。個人としてアピールをお願いします。主催者側の意向に沿わない内容であると判断した場合、中断をお願いすることもあります。あらかじめご了承ください。¹⁹

この注意事項からは、①反原発・脱原発に関係のないテーマに関係のない主張（スピーチだけでなく幟や旗、プラカードといった表現まで）の禁止、②暴力行為の禁止、③チラシの配布や署名活動の禁止、④団体のアピールの禁止というものが読み取れるであろう。

反原連はこのような規則を設けて、官邸前・国会前を「抗議のための場所」としての区切っている。この規則から反原連がどのような方針に基づいて、舞台設営をしているか読み取れる。それは、脱原発・反原発というシングルイシューの設定、非暴力主義、集会的な行為の規制、団体ではなく個人に価値を置くことである。脱原発・反原発というシングルイシューの設定は、この運動が「反政府運動や環境保護運動の一環ではない」（野間 2012:164）ということをあらわしている。つまり、特定の政治スタンスやあるいは政治スタンスの有無に関わらずに、多くの人が参加できるように〈場所〉を設定しているということである。

非暴力主義に関しては、暴力的な「革命」を目指しているのではなく、暴力的になって国家権力からの弾圧が厳しくなり、抗議活動が続けれなくなならないように、つまりは「抗議のための場所」を維持していくための「イズム」なのである。「続けていく」ということに反原連は強いこだわりをみせる。これは参加者も共有している規範ではあるのだが、暴徒化して弾圧を受けて、運動が続かなくなるのは、目的合理的ではない。原発再稼働や推進に対してNOを言い続ける、そのための〈場所〉を確保していくというのが目的合理的であるという判断をしているのだ。集会的な行為の規制は、反原連が官邸前を集会の場ではなく、直接抗議の場として捉えていることを示している。反原連のミサオ・レッドウルフは、経産省前で行われている抗議活動に従来から運動をしている人々と一緒に参加した時に以下のように感じたという。

せっかく経済産業省前にいるのに、抗議ではなくて、集まっている方たちに向かってスピーチをする、自分たちの団体の宣伝をする、宣伝のビラを配る、と。そういう行動は、3.11前は当たり前でしたから、ある意味、わたしには見慣れた光景でした。でも、3.11後の現状からすると、違和感がありました。「どうしてここで集会をやるのか。この経産省前には抗議に来ているのではないか」と思ったわけです。（ミサオ 2013:8-9）

そして、その違和感の後から、反原連だけで経産省前の抗議を行うようになった。そこで重要視されたのは、「声をどれだけ届かせるか」であった。反原連はこのように、集会的なあり方を意識的に避けようとしていた。参加者に向けて語りかけるのではなく、意思決定者たちに直接言

¹⁹ <http://coalitionagainstnukes.jp/?p=4142> 2016/12/19閲覧

葉を届ける。それが反原連のとった方針であり、これは場所をどのように位置付けているかもあらわしている。個人に価値をおくということについては次項で詳論する。

1-2-2 旗ではなく、主張に集まる

また、反原連は、旗や幟を用いる「従来のようなやり方」に関しては、かなり意図的に距離を置こうとしている。そのため、旗や幟に関しては、より詳細なガイドラインを設けている。

(1) 原発問題と直接関連しない文言を掲示することはお控えください。下ろしていただくよう、スタッフが願います場合があります。「直接関連しない」とは、その文言だけを見たときに、一般に原発問題と認識されないものを言います。

(2) 市民団体その他で、団体の名称そのものが特定の政治的テーマに関する主張となっている場合も(1)に準じます。

(3) その他の団体名の旗や幟については現場で下ろしていただくことはしませんが、首都圏反原発連合はそれらの幟旗を歓迎しません。所属よりも主張を！ということ強く提案します。

これらのガイドラインは、できるだけゆるく運用していく所存ですので、参加者の皆さまのご協力のほどを、どうぞよろしくお願いいたします。²⁰

幟や旗に関しては、当初は厳しくしていたようだが、反原連の内部でも悶着があった結果、禁止はしないが歓迎しないという方針が変わったという。しかしながら、それだけ旗や幟を用いる従来の組合を中心とする運動のことを意識していたということである。これは、「従来の運動」のように、特定の人だけが参加しているというイメージを与えなくなかったからである。できるだけ場所をオープンなものにしていき、はじめて運動に参加する人も参加しやすいように敷居を下げる。そして運動に参加する人を増やして、民意を可視化していくことが反原連の目指したことであった。大多数の人数で「直接抗議」を行う場にするのが反原連の設営方針である。

団体ではなく、個人に価値を置くということも以上述べて来た文脈から理解できるだろう。多種多様な意見を持った人々を巻き込んでいくこと、そのためには無用な政治対立を持ち込まないこと。多種多様な人に開かれた場で、直接抗議を行うこと。それは、団体の要求ではなく、個人の一人一人の要求であること。反原連は、自らが主体となったり、民意の代表であるように振る舞うことは意識的に避けている。彼ら/彼女らは、個人の思いが集まる「器」として官邸前・国会前を捉えている。団体での活動が「古臭く」て、「一部の人がやっている」ように見えてしまった結果、日本社会では社会運動が「怖いもの」あるいは「自分とは関係ないもの」だと思われていたと反原連は認識する。個人が参加している運動だとみせることによって、多くの人を巻き込もうとしたのである。それは、『デモいこ！』（2011）というTwiitNoNukesが編集した書籍にも表れている。この書籍では、デモが“特別な”手段ではなく、万人に認められたものだという点を強調し、デモに参加する際の注意点やどのようなことをやってもいいかなど、デモの方法論をわかりやすく、参加者の声も紹介しながら、記述している。

以上をまとめると、反原連は官邸前・国会前における抗議の場所を、「シングルイシューに対して個人がそれぞれの判断で集まり、非暴力的な手段で意思決定機関に直接抗議するための場所」として成立させようとしていることがわかる。このようなシンボリックな意味を官邸前・国会前に持たせることで、抽象的な空間を、ある意味を持った〈場所〉に変え、そこで営まれる人々の行為を意味付けていくのである。

²⁰ <http://coalitionagainstnukes.jp/?p=789> 2016/12/19閲覧

しかし反原連が決めたからといってその規則を参加者も承認しなければ、規則は規則として成り立たない。

ひとつのかかわりが、その境界を守り、その独自性を保全するためには、また集まり全体の波に飲み込まれてしまわないようにするためには、参加者も傍観者も自分の行為をその場にふさわしいように規制しなければならない。(ゴフマン 1963=1980:164-165)

本研究では「傍観者」の問題は扱わないが、参加者-つまり官邸前・国会前に集まった人々も反原連の設定した規範を共有しなければ、それは「意味を持った場所」として機能しなくなる。

私たちは、場にそぐわない行動をしてしまったあるいはみてしまった時に一種の居心地の悪さを感じる。それは規則を内面化して、その規則から外れてしまった行動を不適切だと感じるからである。場にそぐわない行動は、場の意味を宙吊りにしてしまうのだ。反原連の規則がすんなりと受け入れられたのも、参加者の方にその規則を受け入れる準備があったということだ。例えば、野間(2013)にはこのような参加者の声が掲載されている。

個人の想いが集まる場所だった。団体や自己表現ではなくて、普通に生活する人たちが主張する場にしようとしていた所が良かった。学生運動みたいだったら怖いなって思ってた時もあったけど、ちゃんとした。目的は安心して暮らしたいだけなんだ。(野間 2013:44)

そこで次章においては、主催者ではなく、参加者が官邸前・国会前という〈場所〉をどのように捉えており、その〈場所〉でどのような活動を行なっているのかについて論じていくことにする。

第2章 舞台上踊る一織り上げられる様々な場

第2章では、前章までの反原連がどのように舞台を舞台として区切り、維持しているのかを踏まえた上で、今度はその舞台の上で活動をしている人々の諸相を描いていく。

かかわりの区切りを維持するための協力形態のうちでもっとも興味深いものの一つは、空間の配分とでもいうべきものである。すなわち、ひとつの状況に参加している一群の人びとが（対面的なかかわりを持っているいないに関係なく）、利用可能な空間を協力的に配分し、区切りの成立を物理的にようにすることである。（ゴフマン 1963=1980：170）

前章でも述べたように、空間は人びとの行為の集積によってある特定の意味を持ち始め、〈場所〉となる。官邸前・国会前も同様に、多様な意味を持った〈場所〉である。反原連によって、一定の区切りはあるものの、そこから逸脱や意味のよみかえなども行なわれている。その様相を記述していくのが本章のメインポイントである。

官邸前・国会前には様々な表現が行なわれている。シュプレヒコール、スピーチ、念仏、音楽、絵、キャンドルなどなど。それらの活動を記すとともに、その活動相互の交流や反原連との関わりなども同時に記していく。

そして、彼ら/彼女らが自らの行為をどのように意味づけているのか、官邸前・国会前をどのような場として捉えているのかも明らかにしていく。

2-1 「展覧会の絵」～多様な表現のあり方～

反原連は祝祭性や集会的な行為を排した「純度の高い」直接抗議を目指していたが、実際には参加者の求めるものは多様であり、かつ「個人の思いを表現するための器」という反原連の規範が多様な表現を認めなければならないように自らに強いる。直接抗議というシンボリックな意味よりも、多様な表現のための「器」あるいは「受け皿」というシンボリックな意味が〈場所〉を意味づけるにはより価値の高いシンボルとされたのかもしれない。

本節では、反原連とある部分では認識を共有しながらも、独自の行動を行い、場所の意味を多様なものにしていった参加者の多様な表現のあり方を記述していく。

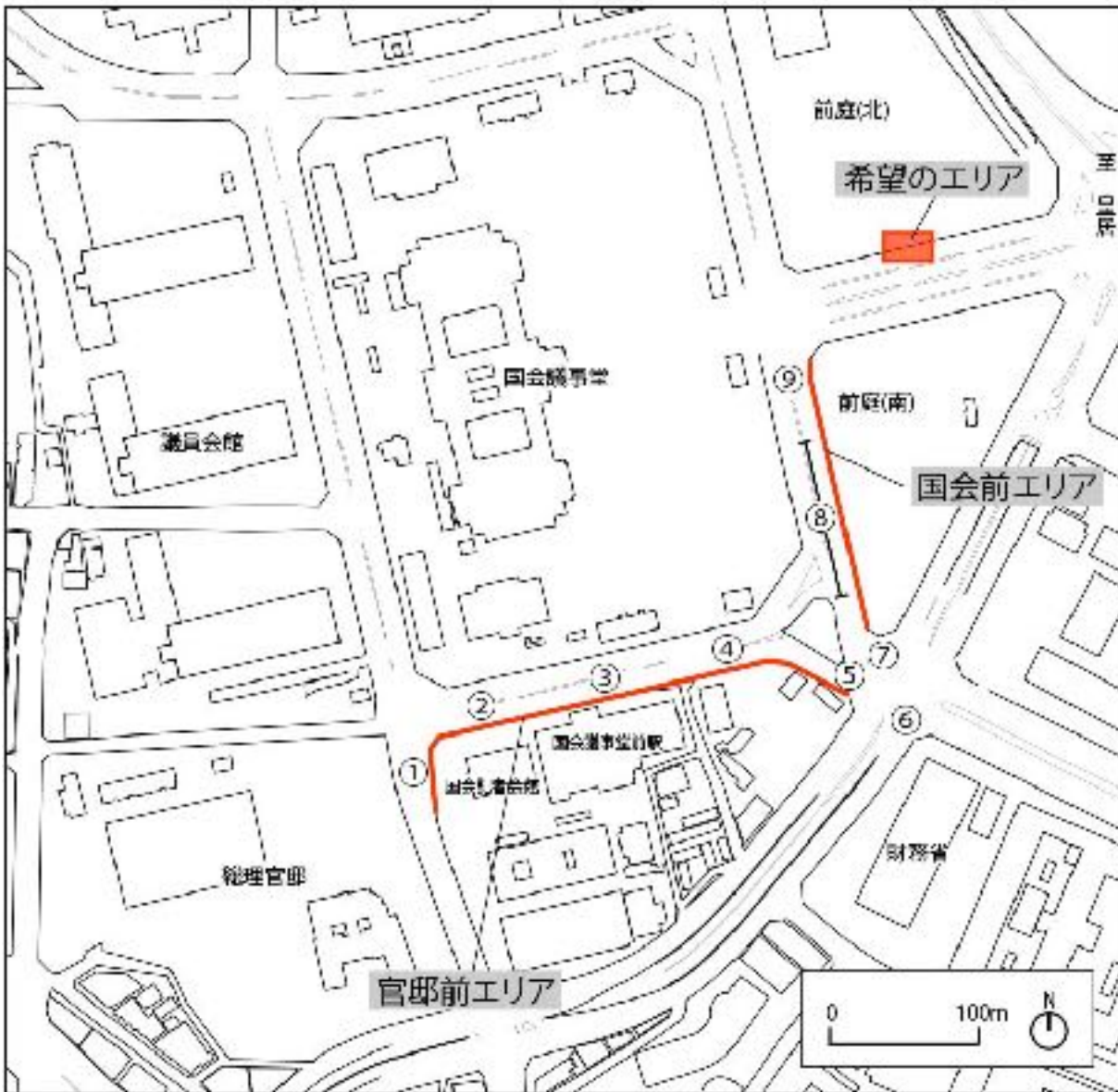
官邸前・国会前における脱原発運動は三つのエリアに分かれている。1つが官邸前エリア、2つ目が国会前エリア、そして希望のエリアである。²¹

それぞれのエリアに特徴がある。まず、官邸前エリアはシュプレヒコールがメインである。これは、そもそも官邸前抗議が首相官邸への直接抗議から始まったことによる。これは、反原連が従来のような集会型の抗議活動ではなく、首相に原発反対の意思を直接示すための抗議活動として官邸前抗議を始めたからである。²²金曜日官邸前・国会前抗議の源流は、この官邸前にある。

国会前エリアは、シュプレヒコールも行うが、スピーチエリアとも呼ばれているように、参加者のスピーチをメインに行なっている。官邸前エリアが、スピーチタイムが1分であるのに対して、国会前エリアはスピーチタイムが3分であることから官邸前エリアとの違いははっきりとし

²¹ これは主催者も参加者も共有している呼び名である。ただし、活動当初は官邸前エリア、国会前エリア、ファミリーエリアであった。ファミリーエリアがのちに反原発連合から脱退して、独自に活動を始めてからは、希望のエリアとなった。この区分けについては、野間(2012)p. 161も参照のこと。

²² この時の詳細については、野間(2012)第2章、特にpp. 56-65を参照してほしい。街頭デモ（市井の人に訴えかける抗議のあり方）から、政府に対する直接抗議にシフトした経緯や、そのことで生じた変化などが書かれている。



ている。官邸前エリアに比べて、座ることができるスペースや展示を行えるスペースもあるという空間的な条件も国会前エリアを官邸前エリアとは異なる雰囲気になっている。

希望のエリアは、このエリアの担い手はもともと反原連のメンバーであったが、現在は反原連の管轄外で活動している。そのため、このエリアは原発問題に限らず、「命を守ろう」というテーマであれば、自由にスピーチができることになっている。また、このエリアは、鳴り物も多く、祝祭のような雰囲気が強い。このエリアの担い手であるS氏が壇上に立ち続け、司会進行やコールの先導を行なっている。このS氏のスタイルや祝祭的な雰囲気を好んで集まる人が多く、ある種のファミリーを形成している。

では、続いて官邸前エリアを詳細に検討していく。まず首相官邸を道路で挟んだ向かい側に反原連とドラム隊がいる。ここが官邸前エリアの先頭（地図上①）であり、大きなトランジットメガホンと反原連のメンバーがいる。その後ろに一般参加者が続き、報道者のためのスペースもその向かいに設置されている。ここから国会議事堂前駅の3番出口までが最前線（地図上②）といってもよく、シュプレヒコールの声が一番響く。

国会議事堂前駅の3番出口と4番出口（地図上③）では、反原連のボランティアスタッフが、官邸前・国会前エリアの地図を持って初めての参加者を誘導したり、反原連が作成しているパンフ

レットなどを配っている。駅の出入り口付近は、官僚なども利用するので、この付近では、自前のプラカードなどを掲げている人が目立つ。

このエリアの少し後ろ（地図上④）では、法華経の僧侶が念仏をあげている。このエリアはシュプレヒコールの音も最前線ほど大きくはなく、念仏も十分に聞き取れるほどである。反原連の拡声スピーカーは、国会議事堂前駅の4番出口付近まで設置されており、ここまでが反原連による「声の支配」が可能な地帯であり、そこを超えるとある程度参加者独自の声を獲得できる領域になる。そのため僧侶は念仏を唱えることができ、歌を歌うこともできる。さらにその後ろでは、絵（福島の実況を表現した絵や風刺画など）の展示がなされることもある。

そして、官邸前エリアから国会前エリアへと渡る地点には、反原連のインフォメーションコーナーが設置されている。（地図上⑤）インフォメーションコーナーでは、今後の日程やパンフレットやイベントの情報、諸²³団体のチラシなどが置かれている。このスペースでは、参加者と反原連のスタッフが会話をし、考えていることや原発関係の最新情報などをやりとりしている。

また、官邸前エリアから復興庁方面に道路を渡った場所（地図上⑥）には、たんぼぼ舎の一つのグループ²⁴がスピーチと独特のコールをしている。たんぼぼ舎は反原連を構成するグループの一つだが、その独特のコール（「げーんぱーつはんたーい」と独特のリズムにのせて行っている）のため、初めて来た参加者が驚いてしまうという反原連の要請から、反原連が管轄する官邸前エリアからは外れた位置で抗議活動をしている。反原連が管轄するのは、あくまでも官邸前・国会前エリアで、それから外れていれば独自の行為を行うことができるのだ。

続いては国会前エリアを詳細に検討していこう。官邸前エリアから、国会前エリアに移動するとまず、前述のたんぼぼ舎の1グループがいる。彼ら/彼女らは、主に署名活動やパンフレット配りを行っている。（地図上⑦）

そのすぐそばでは、韓国式の太鼓を叩いている集団がいる。彼ら/彼女らが活動している場所は、歩道ではないスペースがあり、そこで毎週太鼓を叩いている。

またそのすぐそばでは、個人が行なっているインフォメーションスペースがある。（以下の記述より（地図上⑧）毎週原発に関する情報をまとめて来て、その情報を展示している。ここは一種の討議空間にもなっている。さらに進むと、南アフリカのブゼラを吹いている人がいたり、歌を歌っている人がいたりする。また、忌野清志郎の曲を流している集団がいて、そのすぐそばではキャンドルに火を灯して抗議活動をしている集団がいる。その隣には、軽い食事を出しているグループがいたが、最近は来なくなっている。

地図上⑨辺りから、警察が抗議スペースとして設置しているエリアであり、警察としてはここに参加者を誘導したい。しかしながら、そのコーナーを外れて活動をしていることは既成事実となっているため、コーナーはあってないようなものとなっている。²⁵そのスペースが反原連がメインに仕切っているスペースであり、このエリアではスピーチがメインで行われている。スピーチを行う人は、一般参加者がメインだが、政治家などもスピーチをすることが多い。ここは、直接抗議のためのエリア（官邸前エリア）というよりはむしろ集会型のエリアとなっている。

²³ 2015年の安全保障関連法案に反対するデモが盛り上がり、再び大勢の人が国会前に訪れるようになったため、反原連の要請によって現在の位置へと移動したという。

²⁴ たんぼぼ舎は、官邸前・国会前エリアにいくつかのグループに分かれて活動をしている。その各々が、たんぼぼ舎の発行するパンフレットを配ったり、署名活動を行ったり、スピーチやコールをするなど役割分担をしている。

²⁵ 本来は、国会前エリアはデモができないスペースとなっているため、歩道で行う抗議活動として、脱原発運動は黙認されている。そのため、通行人の迷惑にならないようにという名目でコーンの設置が行われているが、実質的にはほとんど参加者以外に通行人もいないことや、強制的な振る舞いは原発を強めるため、警察は強制力を発揮できずにいる。

国会前エリアから北庭側(憲政記念館方面)へと移ると、希望のエリアがある。希望のエリアは前述の通り、原発に限らず「命を守ろう」というテーマで抗議活動を行なっている。コールされる具体的な内容としては「戦争いらない」「子どものための」「核はいらない」「平和が欲しい」などである。これは「脱原発に関係したテーマ」に限定している反原連の管轄では出来ないことなのである。楽器も豊富で、祝祭的な雰囲気強いエリアとなっている。また、どのエリアにも属さずに、自転車や車で官邸前から国会周辺を回って抗議している人々もいる。

このように、脱原発運動といえども、シュプレヒコール、スピーチ、署名活動、パンフレット配り、念仏、歌、絵、太鼓、インフォメーションスペース、キャンドルなど多様な表現が混在しており、それぞれのやりたいようにやるということが可能になっている。それは、反原連が個人の思いを集める「器」として、〈場所〉を定義し、その「器」というシンボルを人々が共有し、内面化したからこそ可能なのである。

2-2 「やりたい人がやりたいように」-多様な表現のあり方-

「やりたい人がやりたいように」とは参加者からよく聞き取れる言葉である。様々な表現のあり方があるなかで、自分はこういうやり方が好きだからこうしているだけで、相手が何をやるかはその人次第ということだ。こうした感覚が、〈場所〉の表現のあり方を多様化していると言えるだろう。その感覚はある意味現代的といってもいいのかもしれない。そうした感覚は強烈な一体感をもたらさないが、無用な闘争も起こりにくい。

それはまた「団体でくるのではなく一人一人が自らの意思で」という現代の社会運動を表す特徴であり、や「器」としての官邸前・国会前という反原連の意図とも重なりあう。ここでは、そうした多様な表現のあり方の諸相を明らかにしていく。

2-2-1 分化する場所の意味

首相官邸に対する直接抗議のために始まった「金曜日官邸前抗議」だが、大飯原発再稼働の決定前後の抗議活動の大規模化によって、〈場所〉の意味が変容せざるを得なくなっていった。問いの、大規模化するにつれて、様々な人がやってくるようになったからである。反原連が抗議を始めた当初は、参加者は300人から多くても1000人くらいであった。そうした人数では、明示的な規則を定めずとも、「暗黙の了解」として人々にはルールが共有される。官邸前に「直接抗議」に来ているというルールはいわば参加者にとって「暗黙の了解」であった。しかし、大規模化して、反原連の「想定を超える」人数が集まれば、「暗黙の了解」は通用しない。「暗黙の了解」が通じない時には、明示的なルールを策定する必要がある。また、様々な行動に対応しなければならない。そのような過程の中で、〈場所〉の意味は変化し、多様化していった。その変化に合わせて多様な意見を表すための「器」として官邸前・国会前の〈場所〉の意味を再定義するようになった。そして、その「器」の中で人々は自らの思いの表現によって、「器」を彩るようになった。組織的な動員をかけて、一定のルールを共有した上で集まり、そのルールの中で抗議を行うという、いわゆる「組織的な抗議活動」とこの官邸前・国会前の抗議活動が異なる点はここに見いだすこともできるだろう。官邸前・国会前という〈場所〉は、このような相互行為によって多様化していったのである。具体的には、子どもづれや年配者のためのファミリーエリアの創出、そして官邸前から少し離れた位置にある国会前における集会型のエリアの創出などである。人が多くなったため、官邸前だけでは収まりがつかなくなった結果生まれたエリアだが、人が少なくなった現在でもこの区分は残った。現在は、ファミリーエリアは反原連からは離れて「希望のエリア」として独自の活動をしており、国会前エリアはスピーチエリアとして、集会的な雰囲気となっている。混乱の中で、このようなエリアが当初の反原連の目論見を超えてある種自

律的に生じたことは興味深いことである。そして、その区分を人々は受け入れて、その場に即した行動を行うようになった。コールをメインで行いたい人は官邸前に行き、スピーチをしたり聞いたりしたい人は国会前へ行く。〈場所〉の意味が変わり、その〈場所〉の意味に応じて人々も行動を変えたのである。

2-2-2 意志が場所を作り、場所が役割を規定する

まず、官邸前エリアから詳細に見ていこう。このエリアは、シュプレヒコールを中心とした直接抗議のエリアとして、反原連が設定し、一般参加者も認知している。まず最前線であるが、ここでは多くの人々は一体となって「～原発再稼働反対」や「原発やめろ」というコールをあげている。しかしながら、コールがメインといえども、最前線のコールを続けることから距離を置く参加者もいる。その理由として挙げられるのは、「歳だから疲れる」と言ったものや「ここなら座れるから」、あるいは「国会議事堂前駅に近いから」という身体的な問題や、「昔からここだから」という慣性的なものである。

ここから読み取れることは、確かに官邸前エリアが「コールがメイン」だとしても、参加者全員がそのことを認識しているわけでもなく、それよりも身体的な問題や慣性的に官邸前に集まる人も一定数はいるということだ。官邸前エリアは空間的には広いわけでもなく、反原連が官邸前をシュプレヒコールをメインにしていることも明らかだが、その文脈とは異なる理由において自らの居場所を見つける場合もあるのだ。コールをすることにある種意味を見出している人々もいれば、そうではない人々もいる。しかし彼ら/彼女らがコールをしないかあるいはコールをすることに否定的か²⁶といえればそうではない。前者を「意志して好ましい場所を選択した」人々とすれば、「場所が役割を規定した」人々と言ってもいいだろう。

同じことは、国会前エリアや希望のエリアでも見ることができる。国会前エリアは、スピーチがメインのエリアである。これは官邸前エリアと同様に反原連が設定し、一般参加者も認知することだ。官邸前同様に、「スピーチを聞きたくて」という理由で国会前エリアに来る人もいる一方で、「昔からここに来てたから」や「座れるから」という前述と同じ理由で来る人もいる。しかしそのようにして来た人々であっても、場所の醸し出す雰囲気によって、影響を受ける。

例えば、官邸前から国会前エリアに「腰掛けられるから」という理由で移って来た女性は以下のように述べる、

ここに来たら、いろんな人の話が聞けるでしょ。福島の話とか。そしたら、やっぱりこの活動を続けていかないといけないと思うのよ。毎週来るのは大変だけど、毎週来続けなくて。まだまだ全然、原発の問題も福島の問題も終わってないじゃない。（2016/10/14聞き取り）

官邸前から国会前に移動したことは「腰掛けられるから」ということだったかもしれないが、そのことによってスピーチをゆっくり聞くことができるようになった。そして、彼女は原発問題が収束していないこと、さらにこの活動を続けなければならないことを再確認した。ここでも、ある種の場の雰囲気が人の考えや行動に影響を与えることがあることが見出せる。ある人々の行為によって、〈場所〉が果たしている役割や機能は作り上げられるが、その作り上げられた〈場所〉はさらにある人々に影響を与える。人々が〈場所〉をつくり、〈場所〉が人々をつくる。類似のことは、希望のエリアや原発反対隊の例からも見いだすことができる。

²⁶ 実際に、コールをすることに否定的、否定的とまでは言わないまでも得意でないという理由から、官邸前エリアに行かなかったり、あるいはコールをしないという人もいる。

2015年の国会前におけるSEALDsの安全保障関連法案反対の抗議活動は、「金曜日官邸前抗議」と同じ金曜日に行われており、時間も重なっていた。希望のエリアは抗議のスペースも重なる部分があった。その安全保障関連法案反対の抗議活動に参加したある男性は、

安保法のやつで国会前に来たら、後ろの方で〇〇さん（希望のエリアの担い手の一人）たちのやつがやってたでしょ。それで、あれが面白かったの。お二人の掛け合いが（希望のエリアの担い手同士の掛け合い）。でもね、あそこでスピーチを聞いてたら、原発問題への関心も捨てちゃいけないと思ったのよ。（2016/10/21聞き取り）

と述べる。反原発歌い隊のある男性は、

きっかけは、辺野古の基地反対運動に参加した時に歌い隊に出会ったこと。それまでは、原発問題には関心なかったわけ。辺野古の問題も、知事が反対だから最初は大丈夫だろうと思ってたけど、政府が強引にやりだして、腹がたって。それで国会前で反対集会あるから来たんだよ。でも、（原発のことも）色々話して、原発に関する政府の対応もひどいって知ってさ。それで、あんまりデモとか来たことなかったけど、歌を歌って抗議するならいいかなって。（2016/7/15聞き取り）

この二人は、今までは原発問題に関心がない、あるいは関心があっても脱原発運動には参加していなかった。しかしながら、他の抗議活動に参加した時に、たまたま脱原発の運動をしている人と出会い、その人たちから話を聞いて、原発問題に関心を持って、行為者となった。この二人の例は、上記の例とは綺麗には重ならないが、〈場所〉が人々に影響を与えたこと、そしてその人たちがさらに〈場所〉の担い手になっていくこと、そしてそれは偶然的でもあることがわかる。

原（2012）は、高度経済成長期の団地形成と、それに伴う新たな人々との出会い、そして劣悪な生活環境を変えるために人々は様々な政治活動に参加した過程を明らかにしている。そしてその政治活動は、政党とも結びついてた。いわば、団地という「空間」が「政治」を創出したのである。官邸前・国会前という空間も、人々の相互行為によって「抗議の場所」として作りあげられたが、その〈場所〉は、人々を「政治」へと結びつける役割も果たしているのだ。確かに、彼らはもともと政治的関心が高かったかもしれないが、官邸前・国会前が新たな 이슈に気づかせるという機能も担っていることは否定できないであろう。

官邸前・国会前においては、新たに作り上げられた〈場所〉がある人々を政治に巻き込んでいった。この節では、参加者のリアリティがどのように場所の形成と関わっているかの一端が明らかになった。

2-2-3 声から離れて声を上げる

一方で、ここでは反原連の「声の支配」が及ぶ範囲から少し離れたところで声をあげている人々について述べていく。

物理的な空間の配分と共に、声のコントロールも行なわれる。これによって、さまざまなグループがお互いにじゃまされることなしに、今とりかかっている仕事続けることができる。（ゴフマン 1963=1980:171）

最前線は、かなり大きな音であり、隣の人と話してもあまり聞き取れないほどである。それに比べると当然のことながら、後ろの方はその音から距離を取れるため自らの声を選択することができる。後ろの方にも、前述のように「座れるから」と言った身体的な問題から後ろの方を選択する人ももちろんいる。²⁷しかし積極的に、後ろの方を選択する人もいる。例えば、物理学に関係する仕事をしていた人は、

もともとは政治が嫌いだし、感情的に政治に反対するのも嫌い。みんなで一体になってコールをして群れたくはない。僕がこの運動を評価して、ここに来てるのは、反原連が政治色を薄めて誰にでも来れるようにしてるからだ。でも、やっぱり群れるのは嫌いだからここでやっている。でも、コールをすることは健康にはいいね。(2016/7/22聞き取り)

政治色が強すぎず、かつ過剰に連帯を求めるわけでもない反原連の場の運営を評価しつつも、群れるのは嫌いだという理由で後ろの方を選択する人もいる。反原連自身も内部には様々な人がおり、思想的にはまとまらないかもしれないが、「原発を止める」というワンイシューでまとまった「実務家集団」である。彼らは会議では、思想的な話はせず、ただひたすらどのように運営していくかだけを話し合ってるという。こうした方針が、〈場所〉に過剰な意味を与えることなく、個々の選択の幅を広くしている。その中で、人々は「やりたいようにやる」のである。

一方で、後ろの方では積極的に自らの声をもって、反原連のコールとは別に主張を行なっているのが、法華経の念仏を唱えている人々と反原発歌い隊である。法華経の念仏を唱えているのは、日本山妙法寺²⁸とその信者である。彼らは、国会議事堂前駅の4番出口から下ったところの窪地で念仏を唱えている。ここで活動している一人の僧侶はこう語る。

なんでか俺はこういう(シュプレヒコールやビラ配り)のが嫌いなんだな。祈りの言葉があればそれで十分なんだ。安倍政治反対なんていう二項対立も嫌いだ。最近、言葉が氾濫してるね。ただただ祈って、自分の内奥にあるものが輝けばそれでいいんだ。(2016/7/15聞き取り)

²⁷ 前の方に比べれば、後ろの方は座るスペースが多い。

²⁸ 日本山妙法寺とは、藤井日達上人によって開かれた日蓮宗の寺院である。藤井は、明治18年に阿蘇に生まれ、昭和60年に101歳でこの世を去った。彼は33歳の時に衆生教化をの夢告を受け、34歳で中国大陸の遼陽に「日本山妙法寺」を開創した。その後は大陸各地に相次いで道場を開き、関東大震災後には、日本に帰国し、静岡県富士郡本吉原村に内地初の道場を開いた。その後は、内地での道場を拡大するとともに、大陸やリングポール、インドに渡り、相次いで道場を開いていく。彼は、第二次大戦後は、平和憲法擁護の運動を起こしたり、反核運動、反戦運動にも参加していった。そのため日本山妙法寺は現在でも、運動に積極的であり、官邸前に来ている僧侶もまた、日達上人との出会いがきっかけで、入信し、チェルノブイリ事故から反原発運動をしているという。(http://nipponzanmyohoji.net/をもとに作成 2016/07/18 閲覧)

続いて、反原発歌い隊の活動について述べる。反原発歌い隊は日音協²⁹に所属している人と、運動を通して出会った人々によって構成されている。日音協に所属しているAさんが代々木公園で行われた脱原発デモで歌を歌っていたところ、デモなどにはあまり来たことがなかったBさんが歌ならば、自分も進んで参加できると思い、一緒に始めたことが反原発歌い隊の始まりである。2012年から官邸前で歌を歌い始めたという。はじめは二人で始めたが、シュプレヒコールに戸惑っていたが、「歌を歌って抗議することができるなら、自分も参加できそう」と思った人などを巻き込み現在では20人ほどで活動しているという。このエリアまでくれば、反原連のコールの声も小さくなっており、歌を歌えば目立つほどである。

2-2-4 自分が得意な方法で抗議する

一方で、声を出さずに抗議の声を上げている人々もいる。その一つが国会前エリアのBeautiful Energy（通称キャンドルエリア）である。Beautiful Energyの創始者の一人はこのように語っている。「私たちは抗議活動を通じて反対を訴えるよりもむしろもっと美しいものを強調したかった。」（小熊 2013:126-127）

キャンドルエリアではシュプレヒコールなどは行われず、キャンドルに火を灯すこと-原発ではないオルタナティブのエネルギーのシンボル-によって原発に頼らなくてもいい未来を目指している。このエリアには、キャンドルの灯りに誘われて、多くの人が立ち寄り、会話を弾ませる。最近考えていることや原発関係の情報共有、政治の話や身の上話まで、多くの人が交流し、一種のコミュニティスペースのような機能を果たしている。

また、「茶色の朝は嫌だ」³⁰という反原連とは異なるインフォメーションスペースの創設者は、

官邸前ではいろいろな表現をされている方がいますが、読み物的なものがあってもいいかなあ、と思って始めました。³¹

²⁹ 日本音楽協議会（日音協）は、HPによると「はたらくものの音楽サークルの全国ネットワークです。日音協の運動は、みずからを表現する運動です。じぶんの目で生活を、労働を、たたかいを見つめながらじぶんの言葉で表現し、労働者の現実をいきいきと描こうとするものです。」とある。

また、活動としては、「つくり・うたい・ひろめ・つなぎあう、四つの活動」を行っており、メーデーや労働者の集会、手作りのコンサートでうたうこと、歌集・CDづくりなど、日音協はうたを創り、演奏し、普及している。

またHPに「日音協は、労働組合を生みの親として生まれました。」とあるように、もともとは日本労働組合総評議会（総評）に属する労働組合の構成員によって結成された。初代会長には芥川也寸志が就任し、ベ平連の活動にも参加していた。総評時代は、総評から資金を調達し活動していたが、連合へと移行する際に正式な資金援助はもらえなくなる。しかしながら、「連合をはじめとした労働組合と強く結びつき、労働組合の支援を受けている」とHPには記載されており、Aさん曰く「メーデーなどではオープニングで歌を披露する」という。組合の衰退から、現在では個人会員制となっており、会員費によって活動が成り立っている。会員制にすることで、「職場に労働組合がない人、個人事業者、学生、年金生活者も、たくさん会員になっています。」という。

北海道支部、青森県支部、秋田県支部、岩手県支部、福島県支部、茨城県支部、千葉県支部、東京都支部、長野県支部、富山県支部、香川県支部、九州支部、沖縄県支部があり、他に全国規模の労働組合を単位とした支部もある。会員は支部を中心に活動しており、支部のない地域の会員は、直接、日音協に結びついている。また、全国の日音協の会員は、はたらくものの音楽祭（年1回）、機関紙『音楽運動』（月刊）と県を超えた広域のブロック合宿（年1回）なども行っている。（聞き取り調査の結果と<http://www.yomogi.or.jp/~uncle/> 2016/12/5閲覧をもとに）

³⁰ 茶色の朝とは、フランク・パブロフによって書かれたフランス文学のタイトル（原題Matin brun）である。この文学は、ファシズムの寓話を描いたショートストーリーである。

³¹ <http://brownmorning.s3-website-ap-northeast-1.amazonaws.com/html/kanteimaedoc.html> 2016/12/21閲覧

と語る。ドラム隊の竹内は、

ドラム隊の中には、声を上げることが苦手な人もいて、その代わりにドラムを叩くという人がいる。私もスピーチとかは苦手です。（田村2016：56）

と述べている。韓国式太鼓（チャング）を叩いているある女性は、

原発にはもちろん嫌だけど、太鼓を叩くことも楽しいかな。太鼓をたたくのが好きで、ここにくる人も中にはいるのよ。（2016/6/22聞き取り）

彼ら/彼女らは、「原発反対」というテーマや、18:30～20:00という時間を共有していても、反原連のあげる声とは、性質の異なる声をあげている。そこには多様な声の形があるのだ。そしてそのことは、〈場所〉が人々の行為-表現形態の相互作用によって織り上げられていることを示す。反原連のいう「器」としての官邸前が、人々の相互行為によって様々な色合いを帯びて、かつそこには多様な表現とそれに対して独自に与えた意味とが交錯して、抗議する場-表現する場として機能していくことの一部が明らかになったのではないだろうか。

彼ら/彼女らはそれぞれのやり方で「やりたいように」舞台の上で抗議の意思を表現している。次節では、その独自の表現をしている一つの集団を取り上げて、その集団がどのように形成されているかを考察する。

2-3 舞台内舞台-集団はどのように形成されているか-

本節では、舞台内舞台、つまり国会前・官邸前という大きな舞台の中に設立されたいわば小さな舞台がどのように形成されているかを述べる。

集まりに対して自分の役割を適切に表現できない人は、そのような集まりから遠ざかるようになるであろうし、ある時には、自分ではそうしなくとも、そうせざるを得ない場合があるであろう。（ゴフマン1963=1980:218）

とあるように、参加者は自らの役割を適切に表現できる場を求め、集団を形成していくこともある。官邸前・国会前に存在する様々なグループの中から、著者が主に活動しているBEエリアを中心に、どのように小集団が形成されたか、小集団の担い手、集団の構造を明らかにしていく。

2-3-1 成立背景

BEエリアは、前述のように「私たちは抗議活動を通じて反対を訴えるよりもむしろもっと美しいものを強調したかった」という創始者の思いから始まった。彼ら/彼女らが、「美しいもの」としてシンボルにしたものは、キャンドルであった。創設者の一人であるJacinta Hinは「キャンドルはもちろん美しいエネルギーの象徴ですが、同時にこれは静かな瞑想、祈りと希望のシンボルでもあります。」（小熊 2013:127）と述べる。成立のきっかけは、金曜日の官邸前・国会前で

の出会いである。Jacintaによると、「金曜の抗議運動で、IMA³²の創設者であり、私と同様東京在住のDeanと知り合い」、「Deanとその仲間達とともに、IMAプロジェクトとしてBeautiful Energyを創設」（小熊 2013:126）した。現在は、創始者のDeanはキャンドルエリアには来なくなったが、Jacintaは現在も活動中である。

2-3-2担い手

現在BEでコアに活動しているメンバーは、8名ほどである。職業はや性別、住まいもバラバラであるが、彼ら/彼女らの共通点は、外国との関わりが何かしらあったということである。創始者が外国人だということもあって、英語でやりとりが行われたり、外国人がキャンドルエリアに立ち寄りたりすることが多い。そのため、会話に積極的に参加する参加しないは別として、英語を通じたコミュニケーションにストレスを感じない人が集まっていると言えるだろう。

コアメンバーはJacintaを含め外国人が2名、日本人が6名となっている。創始者のDeanの活動であるIMAがライフスタイルの見直しやフェアトレードへの関心が高いことから、コアメンバーの中にはVeganやVegitarianが多い。

職業は、大手企業の会社員から原子力問題に関する研究所員、自営業や派遣社員、退職者など様々であるが、学歴は高く、留学経験や外国での勤務経験がある人が多い。年齢層は、50代以上がほとんどだが、一人は30代である。

BEのメンバーは国会前で知り合ったことをきっかけに、活動に携わるようになった。官邸前・国会前でのグループ形成は、おおむね二つのあり方がある。

一つは、もともとあった関係（地縁、血縁、団体など）を基盤にしているものと国会前・官邸前で新たに出会った人と繋がっていく場合である。

前者のあり方は、一緒に官邸前・国会前に抗議に来ること、あるいは署名運動をすること、反原連を構成するグループに関わりがあった人はスタッフになることに結びつきやすい。例としては、たんぼぼ舎、江東原発とめよう会などである。

一方で、官邸前・国会前で新たに出会った人々は、はじめに独自に活動していた人（舞台内舞台を作り上げていた）の活動を手伝うということに結びつきやすい。BEは後者の例である。他には、韓国式太鼓のグループや反原発歌い隊などである。

舞台内舞台を作り上げているグループの特徴としては、創始者がシュプレヒコール以外の表現—自分が得意とする表現—で抗議をしたいという意志で独自の活動を始め、シュプレヒコールがメンバーの抗議のあり方に馴染めなかった人が参加するという構造がある。例えば、BEエリアのコアメンバーの一人は、

友達に誘われてデモに来ただけど、デモなんか来たことがなかったから、怖いんじゃないかなって思っていて。でも、原発には反対だったから。それでJacintaさん達のところを見つけて、これなら私もお手伝いができると思ったの。（2015/11/13聞き取り）

と語る。

³² IMAとは、Intrepid Model Adventureの略称である。IMAはDeanによって、2011年に立ち上げられたオープンコミュニティである。ライフスタイルを考え直したり、東北へボランティア活動をしに行ったり、フェアトレードに取り組む団体の支援などを行っている。<http://www.intrepidmodeladventures.com/home/about-us-2/> 2016/12/17閲覧より作成
詳細は上記URLを参照のこと

この発言は、前述の辺野古基地移設反対の集会をきっかけに歌い隊に入った人の理由とも重なる。デモに慣れていない人にとっては、デモとは「怖いものだ」という捉え方が強かった。いわばデモという行為には一種のスティグマが押されていた。そのスティグマを回避しようと、主催者はかなり意図的に「怖いデモ」のイメージを壊すように努め、〈場所〉のあり方も「従来の運動」とは異なるようにしようとして来たことは前述のとおりである。

その「怖さ」は「ヘルメットをかぶって～」という学生運動のイメージからくるものもあれば、怒りの直接表現（「原発やめろ」など）に抵抗感があるという場合など様々な理由があるが、官邸前・国会前抗議、もとい「脱原発運動」に参加した人は、現場で行われている表現の多様さや人々の真剣さを目の当たりにして、参加障壁が下がったという人も多い。³³それは主催者の「器」作りに徹することや参加障壁を下げようという努力もあっただろうが、活動を豊かにしようとする人々の意志的な努力、そして「組織ではなく個人として」という言説-規範との相互作用の結果であろう。

多様な表現を許容する「器」としての官邸前・国会前、そしてその「器」に彩りを添えていった人々の活動は、参加者の裾野を広げたであろうし、震災後に孤独感³⁴を感じている人々に表現の場と解放の場を与えた。BEの担い手達もまた同様であり、彼ら/彼女らは日頃抱えている不満や怒り、原発問題の現在などを議論し、共有している。町内会などの地域的な繋がりやそれに伴う政治との回路の喪失がますます進んでいく中で、このような政治的空間が現出したのはある意味では必然的な流れなのかもしれない。

官邸前・国会前における出会いは、新たな「社会関係資本」（パットナム 2000=2006）の創出にもつながっているのだ。しかし、その一方で指摘しておかなければならない問題もある。それは社会関係資本が高い人ほどこうした運動に参加しやすいということである。そのことに留意しつつ、運動に参加したきっかけをBEを中心としながら見ていく。

2-3-3きっかけ

聞き取り調査やBEでの参与観察からわかったことだが、運動に参加している人は、何かしらの社会活動に積極的に関わったことがある人が多い。これは、反原連の担い手の性格で述べたことも重なる。

安保闘争や学生運動を始め、新宿フォークゲリラやイラク反戦運動、フェミニズム運動といういわゆる社会運動と見なされる運動から、地域の行事（PTAや祭り）や地域行政の仕事、ボランティア活動など、何かしら関わっている人が多い。あるいは、自営業者、その中でも特に音楽やデザイン、撮影など創作活動に関わる活動に従事している人が多い。これは小熊(2013)における「それぞれの証言」からも詳しく読み取れる。寄稿者のほとんどが何かしらの積極的に携わった傾向があることがはっきりしている。

BEのメンバーもこうした活動への参加経験がある人である。学生運動の経験者や、震災前から留学生の受け入れボランティア活動やフィリピンの自動支援に携わっていた人、自営業-撮影関係や塾講師、外国人ながら神主になっている人などである。彼ら/彼女らはもともと社会的な関心も高く、社会関係資本も充実していた人が多い。その繋がりや、国会前・官邸前抗議に参加した人も多い。

³³ 小熊同上p. 90, p. 92, p. 111などからも初参加者の戸惑いやそこからの変化を読み取ることができる

³⁴ 震災直後の周りの人々との温度差や自由にもものを言えない雰囲気などは、聞き取りからもよくわかったことだが、小熊同上「それぞれの証言」からもうかがえることである。

それは他のグループでも同様である。例えば、たんぼぼ舎でビラを配っているスタッフは「福島からの避難者の炊き出しをしていたところ、たんぼぼ舎の存在を知」り、たんぼぼ舎のビラ配りの手伝いを始めたという。彼女の面白いところは、たんぼぼ舎のビラ配りをしながらも「たんぼぼ舎の会員でもないし、たんぼぼ舎のことはよく知らない」ということである。これは官邸前・国会前でよく見られる光景だが、反原連のスタッフもコアメンバー以外では顔見知りでもないようなことが多く、知り合いの知り合いなど「弱いつながら」で結ばれている。その「弱いつながら」は場所を維持することを可能にしているのだが、これはもともとの社会関係資本が官邸前・国会前という場所に反映され、さらにそれが広がっていると見て取ったほうがいい。

運動に参加した動機は表層的には、つまり「どうして運動に参加したのですか？」という問いからは、「原発に反対したいから」あるいは「政府が信頼できないから」といったものしか返ってこない。しかし、聞き取りと参与観察の結果わかったのは、彼ら/彼女らはもともと社会運動にアクセスしやすい土壌にいたということであり、全くの無関心や社会的な活動に全く興味を持っていなかった人が突然運動に来るということは当然のように聞こえるかもしれないが、ほとんど目にすることができない。社会関係資本に恵まれた人々は、その社会関係資本を元手にさらに社会関係資本を充実させる一方で、社会関係資本に恵まれない人はますます孤立化していくというのは、経済資本におけるそれと同様であるかもしれない。官邸前・国会前においても、「無関心な層」とか「なんでみんな反対しないんだろう」という声はよく聞く。しかしながら、関心を持つために必要な土壌、そして関心を持った場合に、例えば抗議運動をしようと共同できる人的ネットワークがあるかないかは個々の意識以上に重要な点であろう。

2-3-4 集団の活動

BEエリアは、キャンドルに火を灯して、そのキャンドルの周りをメッセージを書いたシェードで囲んでメッセージを火の明かりで照らし出す。メッセージは国会前に集まった人に書いてもらっている。キャンドルやシェードは自腹やドネーション（物品、金銭）で持ち寄っている。キャンドルは、国内外問わず様々な人が寄付してくれ³⁵、メッセージも複数言語で書かれるなどインターナショナルに繋がりがあがる。キャンドルエリアのメンバーではないが、キャンドルを持ってきてくれる人もいる。キャンドルの趣は、季節ごとやハロウィンやクリスマスごとに変えており、積極的に変化をつけようとしている。そのために、毎回違った雰囲気となっていて、立ち止まったり、写真を撮ったり、メンバーと話したりすることがよく起こる。他のスペースに比べてこのエリアでは、交流も多く、顔なじみになりやすい。コアメンバーではないが、毎回このエリアに来る人もいるし、片付けなどを手伝ってくれる人もいる。官邸前・国会前の交流スペースとして機能しているといっても良いだろう。メンバーは毎回と言っていいほど、活動終了後に食事を食べに行く。開放的な雰囲気もあり、メンバー以外の人も誘って食事に行くこともある。官邸前・国会前の抗議は大半の人が抗議終了後速やかに帰ることが多いが、このエリアでは食事に行くことになっている。コアメンバーのやり取りは、メッセージングというアプリで行われており、メッセージングで参加日程の確認やイベントの共有、自分がやっている活動の紹介などが行われている。街頭デモがあれば、メンバーを誘ってみんなで参加することが多い。メンバーで結成記念のパーティーなどをすることもあり、官邸前・国会前以外でも交流することが多いグループである。

とはいえ、これは他のグループにも言えることである。反原発歌い隊は、グループで別の集会でも歌を披露することがあるし、韓国式太鼓を叩いているグループも祭りなどにみんなで参加するこ

³⁵ この活動は世界的な取り組みの一環として行われており、FaceBookグループで世界中でキャンドルを灯すことで、脱原発・反原発運動を展開している人びとと繋がっている。

とがあるという。ドラム隊のあるグループも演奏会に出ることがある。このように官邸前・国会前でできた関係は国会前・官邸前を超えて、一つの社会集団を形成している。



2-3-6 BEでの役割

BE内部での役割は曖昧でおそらく当人たちは無意識的なうちに分担されている面がある。社員のMさんは、毎回のようにスピーチをする。これは、スピーチをする人が少ないということとMさんと反原連との関わりがあるからなのだが、毎回スピーチをすれば、顔も名前も覚えられる。そのため、顔が広く、彼を尋ねて来る人も一定数いる。Mさん自身も社交的な側面があり、積極的に参加者と交流しようとしているし、折に触れて「みんながどういふつもりで来てるのか気になる」と述べている。彼はある意味では、キャンドルエリアを象徴する役割を果たしているし、キャンドルエリアのメンバーと参加者を繋げるという役割も果たしている。

撮影の仕事を行なっているKさんは、持ち前の手先の器用さや仕事柄さまざまなものを組み立てるので、キャンドルの再利用をしたり、イベントの時は機材を設置するなどしている。またカメラで記録を捉え、活動を配信している。

派遣社員のOさんは、音楽が得意なため、大きなイベントの時などには楽曲を作成し、それを映像と結びあわせて編集し、BEエリアで披露することもある。また、得意の英語を活かして日本語を翻訳して世界の脱原発運動に紹介したり、逆に海外の運動からのメッセージを日本語に訳したりしている。

元商社勤めの旦那を持つKさんは、キャンドルを季節ごとに変えたり、クリスマスやハロウィンなどのイベントに合わせて、フィギュアなどを持って来たりする。

塾講師のOさんは、数ヶ月に一度、自分の読んだ本からお勧めのものを持って来て、BEエリアでブックフェアを行うことがある。

このように、互いが自らの得意なことを活かして、集団における役割を果たしていることを見て取ることができる。しかしこれは明示的・意識的なものとはいえ、特別な役割規範なども存在していない。そのため、役割に対しての期待も見られない。

以上述べてきたことが、舞台内舞台における曖昧な役割分業であるが、次節では、それぞれの舞台内舞台が全体としてどのような役割を、官邸前・国会前というより大きな舞台で果たしているか見ていく。

2-4 場所はどのように機能しているか-全体的な舞台の様相-

この節では、それぞれの集団や個々の参加者が全体としての〈場所〉の雰囲気やどのように構成しているか考察していく。集団や個人同士に関わりはあるのか、あるいは独自の行動を行なっている集団が官邸前・国会前という場において果たしている役割は何かということが明らかになるだろう。

2-4-1 交流の諸相

官邸前・国会前では、あまり交流が見られない。全く交流がないわけではないが、顔見知り程度で、挨拶はするけれども、名前も知れなければ、深く話したりもしないという人がそれなりの数はいると思われる。もちろん交流を積極的にしている人もおり、官邸前・国会前での出会いをきっかけにグループを形成して、他の活動と一緒にやったりする人もいるが、そのような人はあまり多くないと思われる。また、グループ同士の交流もあまり見られない。ある方は聞き取り調査をしていて、筆者が「交流はありますか?」と聞いたところ、

そういわれてみればないねえ。だいたいみんな毎週同じところにいるから、顔は知っているけど。ああ、あとたまにお菓子が回ってくるからそれを頂いたりくらいで。あんまりお話とかはしないかな。(2016/9/16聞き取り)

と答えた。この方は、官邸前エリアにいるのだが、官邸前は確かに近くの人と話すにはコールの声が大きいので、話す余裕はないかも知れない。しかし「そう言われてみれば」というように、交流がないこと自体、意識にのぼってはいなかったようだ。「個々人が判断して、個々の意志で」という参加者の意識は、交流しようという方向にはむかひにくいことが想像される。連帯感は希薄であり、地縁や血縁といった従来のネットワークでくることはあるが、新たな繋がりというものはあまり見られない。

参加者のメンタルマップは意外とせまく、官邸前にいる人は国会前の状況がよくわからず、国会前にいる人は官邸前の状況がよくわかっていないことが多い。意識的に全てを回る人もいるが、それは写真や映像を撮る人が多く、〈場所〉の全体像を把握している人は少ないのである。

一方で、新たな繋がりを見出した人は、何か独自の表現をしていく傾向がある。グループを形成して、新しい活動を始める。あるいは、従来からの活動に新しい人が参加する。歌い隊やキャンドルエリア、韓国式太鼓、清志郎スペース、ピースサイクルなどが代表的であろう。この活動は、従来からの活動もあれば新しく始まったものもあるが、官邸前・国会前で新たにできたネットワークで活動している。

その中でもBEエリアは交流が多い方である。それはBEエリアが交流しやすい環境であると同時に交流を積極的に志向する個人がいることが大きい。ただし全体的な傾向としては、連帯感は希

薄であり、グループごとの交流も個人同士の交流もあまりない。まさに各々が「やりたいことをやりたいように」しているのだ。

しかし連帯感が希薄であっても、〈場所〉は成立し、全体としてはある雰囲気醸し出し、それは人々にも影響を与える。その中で、あるグループや個人が果たしている役割もあるのだ。続いては、官邸前・国会前が全体としてはどのような機能-役割を持っているかについて考察していく。

2-4-2 「表現の場」「学びの場」「討議の場」「つながりの場」

官邸前・国会前は、「表現の場」「学びの場」「討議の場」「つながりの場」4つの機能-役割を果たしている。

「表現の場」としての機能は、上記に詳しく述べて来たが、直接抗議やスピーチ、音楽、念仏、キャンドルなどそれぞれが自分にあったやり方で脱原発・反原発の意志を訴えることができる場所としての官邸前・国会前のことである。

「学びの場」とは、スピーチやたんぼぼ舎や「茶色の空は嫌だ」を始め様々なグループや個人が作っている原発や福島に関するパンフレットなどを通して、原発問題や被災地や被災者の現状を学ぶ。そのことを通して、まだまだ問題は終わっていないこと、そして抗議を続けなければならないことを知る。現地では未だに事故収束のために働いている人もいれば、未だに故郷に帰れずに避難を続けている人もいる。政府が原発をインドに売ろうとしていることや着々と再稼働が進んでいることなどを人々はスピーチやパンフレットで知る。スピーチをする人は、福島から避難して来ている人や原発に関する研究をしている人、海外の脱原発運動と繋がりがある人や原子力規制委員会を聴講している人など多様である。それらの人々からもたらされた、情報を聞き、原発問題が未だに解決されていないことを知る。チラシはたんぼぼ舎という3.11以前から原発問題に取り組んで来た団体が作成したものや反原連が作成したものなどがあり、それを毎回全て読んでいる人もいる。このように、“普通に”生活していたら入ってこないような情報を官邸前・国会前では手に入れることができるのである。

そうした情報を得て、人々は討議を始める。討議を可能にしているのが、キャンドルエリアや「茶色の空は嫌だ」など一種のコミュニティスペースとなっている〈場所〉である。もちろん、こうした〈場所〉以外でも討議は行われているが、キャンドルエリアや「茶色の空は嫌だ」はコミュニティスペースとしての役割を帯び、人々がそれを認識しているが故に、討議が行われやすい。討議ではさらに自分が知っている情報の交換や自分がいま考えていることを話し合う。これが「討議の場」としての機能である。ここでは、ある集団作り出した舞台内舞台が特定の役割を果たすこともあるのだ。

前項でも指摘したように連帯感は希薄だが、全くつながりがないわけではない。官邸前のある集団は、デザイナーなどが多いコミュニティとなっているが、彼ら/彼女らは、反原発を示すステッカーを作り、参加者へと配っている。そのステッカーをつけることで、日常的に抗議に意味を示すことにもなるし、ある種の連帯感も作り上げる。ある意味では集団の連帯感を強化するシンボリックなものとしての役割を果たしている。また、BEは外国人が多いこともあって、海外の脱原発運動と反原連の活動を媒介する役割も担っている。海外と官邸前・国会前をつなぐ役割を果たしているのだ。例えば、インドの反原発運動の活動家³⁶と官邸前・国会前の活動をつなげたりしている。

³⁶ その活動家が、前述の日本山妙法寺の一つの寺に宿泊することもあったという。

官邸前・国会前で勉強会への案内をしている人もいるが、何人かが実際に参加したこともあるという。また、前述のように、官邸前・国家前で、新たなつながりを得て活動した人もいる。そうしてできたつながりは、普段の生活では「政治とか原発の問題ってできなくて不満があったけど、ここならできる」ということで、ある人にとってはある意味では欠かせないものになっていることもある。政治家もスピーチをすることがあり、市民の声と政治とをつなげる機能も果たしている。このように官邸前・国会前は様々な意味での「つながりの場」としても機能していることがわかる。

反原連は「直接抗議の場」として機能させようとしたが、人々の相互的な実践行為によって官邸前・国会前は、多くの機能を果たすようになったということがわかる。

2-5 リアリティの諸相-演者にとっての舞台の意味-

上記に述べたような相互行為の蓄積の過程で、〈場所〉には様々な人のための固有の意味も生じてくる。本節では、人々が原発事故をきっかけにどのように考え、そしてどのような意味を〈場所〉に見出しているかを考察していく。

例えば、「孫に申し訳なくて」「国会前での表現を追求することが楽しくて」「原発が経済的に不合理だから」「政府が信用できない」「日本のあり方が不安である」「国家の中核で叫ぶことに意味がある」「この場にこれない人の分までも」「被災者を代表して」様々な抗議活動の意味づけがある。こうした意味づけの諸相を考察していくことが本節の目標である。このことから個々の思いがあつまる〈場所〉としての官邸前・国会前の特徴が明らかになるだろう。

2-5-1 何に反対しているか？

金(2016)も指摘するように、3.11以後の活動のきっかけは複合的で重層的であった。ここでは、活動に関わるようになった人々の動機的な側面について述べていく。

官邸前・国会前に集まる人々の問題意識は、原発それ自体に対するものと“原発問題”を生み出した構造的な問題に対する概ね二つのレベルがある。もちろんこれらは、相互に重なり合うものであるが、それぞれ具体的に考察していく。

2-5-1-1 原発それ自体への反対

原発それ自体への反対であれば、「放射能が危険」「原発は手に負えない」「事故が起こった時に負担が大きすぎて経済的に不合理」だというのが挙げられる。原発それ自体への反対を表明する人は以前から原発反対運動をしていた人や学者や理科系の研究職や子どもをもつ親などがあくまで筆者の聞き取りの結果からわかった範囲ではあるが多い傾向にある。

放射能は、実際に身に降りかかる可能性のある脅威であり、特に子どもや孫をもつ人々には切実な問題であった。ガイガーカウンターを取り寄せては、自宅周辺の放射線量を測定する人も大勢いた。ガイガーカウンターによる放射線の測定を業者ではなく一般市民が行うこともあった。

(小熊 2013:114-117) こうした状況の中で、人々は原発反対運動へと参加して行ったのである。放射能が首都圏まで影響をもたらしたことは、首都圏における運動に影響を与えたことは辰巳(2016)でも明らかにされているとおりである。

また、以前から原発反対運動に関わっていた人々は、放射能の危険や原発自体の危険を以前から主張していた。彼ら/彼女らはある程度以上の専門知識があるため、震災直後の政府の発表や基準値が“おかしい”ことに気づいていた。そこで原発運動へと関わっていくことになる。現在も、専門的な知見を生かして、専門性が必要とされる政府の文書などを読み、その情報をまとめている人もいる。彼は、国会前で自ら主催する勉強会の案内状を配っているが、積極的に反原連の活動

(スピーチなど)には参加しようとはせず、あくまでも国会前に来る参加者に向けて勉強会の案内をしているだけである。反原連は勉強会への案内を抗議時間中にすることを奨励していないため、彼は抗議時間外に案内を配ったり、反原連の監視が緩い国会前や管轄外の希望のエリアでチラシを配っている。彼は官邸前・国会前に抗議をするというよりはむしろ、勉強会への人集めに来ていると言える。専門性が高い(研究職や学者)人々はこのように、反原連の活動からは距離を置くことが多い。その理由としては、「原発自体に反対していて、政権批判をしたいわけではない」や「党派性を出したくない」などがあげられる。このような人々は、場の中心から離れたところで活動していることが多い。「原発それ自体への反対」がデモの参加動機になる場合は、自分や子どもに対する放射能の直接的な脅威に怯える場合と、専門的な観点から放射能への危険や原発の経済的不合理性を批判する場合がある。特に後者の場合は、反原連の活動からは一歩引くことが多い。

このことは、反原連の構成員自体が、前者の理由から参加した場合が多いこともあり、そのため従来から活動していた人や専門的知見が“もともと”³⁷あった人のリアリティに多少のズレがあることから考えると考えられる。そうであっても、同じ時間を共有し、抗議時間が終われば帰宅するという現象が見られるのは興味深いことであり、「器」としての官邸前・国会前という規範は参加者の間で受け入れられている。

2-5-1-2“原発問題”を生み出す構造的な問題への不信

“原発問題”を生み出す構造的な問題への不信としては、自分が仕事などをしている中で疑問に感じた不条理な構造と原発をめぐる対応と同じであり、それは日本社会の構造的な問題でもあるというものが代表的である。こうした人々の中には、もちろん「原発それ自体の問題」を問題視している人もいるが、それ以上に日本社会の構造的な問題を批判することが多い。そのような人々は、原発問題以前から日本社会に疑問を持っていた人々が多く、従来から感じていた問題が極端な形で“原発問題”に現れ、かつ身の危険も感じたということがあいまって運動への参加の動機となっている。主催者である反原連のコアメンバーにはこうした人が多い。またそれは官邸前・国会前に集まる多くの人もそうである。例えば、反原連創設のメンバーの一人である椎名宏吉は、

私たちは薬剤師として、EBM(Evidence Based Medicine:根拠に基づく医療)という動きに傾注しており、その中で巨大企業と政界、学会、マスコミが協同し市民の健康を犠牲にして巨大な利益を得ていることがあると気づくようになりました。(中略)原発事故へと関心が移って勉強すると、原発は一部の力を持った人たちの利益を優先して私達市民を犠牲にするものであったことを理解するようになりました。(小熊 2013:22-23)

と述べている。コミュニティスペースとなっているキャンドルエリアでも、「一部の人の利益ばかり追求して、原発再稼働して、どうするんだろう」「このままだと日本はどうなっちゃうんだろう」という話が多くなされる。

この場合は、原発反対運動の延長で政権批判や政策批判に結びつきやすく、反原連が仕切る〈場所〉において、積極的にスピーチやコールなどに参加することが多い。反原連は政策批判や政権批判をすることが多いので、そうした価値を共有していることが大きいだろう。これは、上述の原発それ自体に反対している人の行動とは対照的である。実際に、反原連は脱原発・反原発という

³⁷ もともとという言葉で“”で囲んだのは、反原連の構成員の中にもともと知識があった人もいる上、活動の過程で専門的な知識を身につけていく人もいるためである。

シングルイシューという制限をかけて〈場所〉を仕切っているが、〈場所〉を離れた活動³⁸の際は、TPP反対運動や安保法案反対運動、辺野古基地反対運動と共同することもある。一方で、「原発をうまく扱えるならば賛成だが、現状の原発政策の意思決定の過程などを見ているとそれが無理そうなので反対する」という場合もある。この場合は、脱原発・反原発というテーマを共有していなくても、日本が抱える政治の構造的な問題に抗議するために官邸前・国会前に来る人もいるのだ。このことは「個々の思いが集まる器」というシンボリックな価値が機能していることを示唆する。

以上のように、何に反対しているかで、場所における行為のあり方も異なることがわかる。それは反原連の設定する〈場所〉のあり方に馴染むか馴染まないかという問題でもある。しかしながら一方で、あらゆる参加者に共有されている価値としては「器」、つまり多様な意見を表明するための「器」としての官邸前・国会前というシンボルは参加者の中で受け入れられ、維持されているのだ。

2-5-2 抗議を続ける意味

ここでは、参加者が抗議をする意味をどのように捉えているのかについていくつか記述していく。もちろん一人一人によってかなり意味づけは異なるが、ここではその中から代表的なものについて考察していくことにする。

2-5-2-1 意思し続けること

「抗議をしないで黙っているのは再稼働の流れを黙認しているのと同じことだ」「人数が少なくなっても続けていくのが大事。」「私にはこういう形でしか意思を表明する方法がないけど、ここに来ることでせめて政府の決定に抵抗できれば。』

このように、再稼働容認や原発の輸出などの政府の方針に対して、抗議の意思を示し続けるのが大事であるという考えから抗議を続ける場合がある。選挙においては、脱原発・反原発を掲げた政党を多数派にはできず、ロビイングできるほどの組織力もあるいは繋がりもない人々からすれば、抗議の意思を示すには、官邸・国会といった政府の意思決定機関の前において抗議をする方法を取りやすい。「デモをいくらやっても選挙結果は変わらない。」だからこそ「デモなんて意味がない。」という意見もあるが、デモでしか抗議の意見を表明できる手段がないと感じている人が一定数以上いるということも事実である。そしてそれは、政治家と市民の間の回路が細くなっていることも表している。抗議の意思を示し続けることはある意味では「自己満足」かもしれないが、ある決定に対して不服な時に意見を表明できる〈場所〉が用意されていることは意味のあることである。ある参加者はこう語る。

（原発のことを）周りの人と話がしづらかった。特に反対ってことは言いづらかった。でもここに来たらみんな反対しているし、反対していいんだって思えた。反原連の人たちがそういう場所を作ってくれていることには感謝している。ここでは仲間もできたし。ここは地味かもしれないけど、政府に抗議の意思を示し続けることが大事だと思う。（2016/10/7聞き取り）

しかし、「居場所」や「自己満足」だけなのだろうか。原発それ自体には賛成であるというある男性はこう語る。

³⁸ 例えば街頭におけるデモや大規模なデモ集会など。

デモをやってもそれだけで変わることはないと思う。でも変わらなくても声は上げ続けるべきだと思う。そういう声がある。そういう人たちがいるというのアピールした方がいい。実際ここには国会議員も来るんだし、それは大きいと思うよ。(2016/8/12聞き取り)

抗議の意思を表すことを続けることは、反対している人がいることを可視化することであり、かつそれは政治とのつながりも意思し続けることであるのだ。彼が述べるように、国会前エリアには政治家も来る。政治家にとっても、被災地の現状や抗議をしている人がどのような考えを持っているか知ることは必要なことであろう。

2-5-2-2来れない人の分まで

「本当はここに来たいけど来れない人もいる。その人の分まで。」
来たいけど来れないには様々な場合がある。家庭の事情で、地域的な事情など様々である。家庭の事情であれば、例えば

昔は一緒に来てた人がいたんだけど、その人のお母様が病気になっちゃって介護が必要になったの。それで、来れなくなっちゃって。でも彼女も反対だったし、その分、私が彼女たちを代表して来なければって思う。今はここも人数少ないけど、世論は原発反対が多数だし、ここに来たくても来れない人っていっぱいいるでしょ。(2016/10/7聞き取り)

というように、介護や子育ての問題から来れなくなる人もいる。また遠方に住んでいて来れない人がいることや引越しなどで来れなくなった人もいる。官邸前・国会前抗議は全国的な規模で広まった。全国の各地で、金曜日に同様の抗議活動が始まったのだ。³⁹ 官邸前・国会前はそうした活動のシンボルとして機能している。

ここでやり続けるべきだと思う。こないだスピーチを聞いていたら、初めてここに来たって人がいたよ。その人は地方で活動しているらしいんだけど、ここでこの抗議が続いていることに励まされているって聞いていた。ここって反原発運動の象徴だと思う。だからこそ、ここでやり続けなきゃいけないし、僕はその頭数の一人として来続けたい。(2016/7/22聞き取り)

このように来れなくなった人の分や来れないでいる人の分まで、自分が代表して来続けなければならないというある種の倫理観とつながりの意識で、抗議を続けることに意味を見出している人もいる。

2-5-2-3罪の意識

つながりの意識と重なる面もあるが、「子どもたちに対して申し訳ない。」「自分たちの世代がこんな社会を作ってしまった。」という罪の意識から抗議を続けることに意味を見出す場合もある。これはかなり聞こえて来る言葉である。例えば、筆者とキャンドルエリアのメンバーが話している時に、これから日本はどうなっていくのだろうかという話をしていた時に、

まさと(筆者の名前)さんすいません。私たちはもう人生あと少しだけれども(笑)、若い人は大変。私たちがこんな社会を作ってしまった。

³⁹ デモの全国的な展開については、木下(2013)に詳細に記されている。

俺なんて、ついこないだまで選挙にも行かなかった。政治でなんか変わるとも思ってなかったからね。でももうそんなことも言ってもらえなくなった。恥ずかしいけどね。(2016/12/25に行った会話)

また、

これから将来のある子どもたちに被曝させてしまったかもしれない。私は原発にはなんとなく反対だったけれども、特に反対運動とかもするわけでも、関心を特別に持つわけでもなく、その結果容認してしまった。そんな自分が恥ずかしい。(2016/7/22聞き取り)

というように、将来世代に負担をかけさせるような構造を自分たちの世代が作り上げ容認して来たことに対して、罪悪感を感じている人は多い。彼ら/彼女らは、原発政策を推進してきたというわけでもなければ、原発を積極的に誘致したわけでもないが、一種の罪の意識を感じている。自分が現在のような構造を作ってきた一人だというある意味ではただそれだけである。それだけであるが、人は罪の意識を感じることがある。カール・ヤスパースは、罪を4種類に分けて考えた。「刑法上の罪」、「政治上の罪」、「道徳上の罪」、「形而上学的な罪」の4つである。ヤスパースは、

そもそも人間相互間には連帯関係というものがあり、これがあるために人間は誰でも世の中のあらゆる不法と不正に対し、ことに自分の居合わせたところとか自分の知っているときに行われる犯罪に対して、責任の一般を負わされるのである。(ヤスパース 1946=2015:54-55)

として、

いかなる行為もまた道徳的判断にどこまでも服している。審判者は自己の良心であり、また友人や身近な人との、すなわち愛情を持ち私の魂に関心を抱く同じ人間との精神的な交流である。(ヤスパース 1946=2015:61)

とのべる。

3.11以後、自分の子どもたちに対して、つまりはこれから社会の中で生きて行かなければならない人々に対して、罪の意識を感じて行動を始めた。その罪の意識は、自らの立っている足場を照らし返した。そして、その足場が崩れかかっていること、そのような状況で自分たちよりも後に生まれて来た人々は生きていけないといけなことを気づかせた。自らと自らが寄って立つ足場への反省的な想像力を持ち、自分にできることを始め、それを継続していくことに意味を見出し始めた。ヤスパースが、

道徳的な罪からは洞察が生まれ、それにもなって罪滅ぼしと革新とが生まれる。これは内面的な過程であるが、この過程がやがて世界のうちに現実的な結果をも生ずるのである。

とのべるように、その道徳的な罪の意識から、人々は行動を起こしはじめた。ドラム隊の小田マサノリはこう語る。

もしいつかどこかで、被災地の子どもたちから、『あの時、あなたは、どこで何をしましたか?』おそう問われた時ちゃんと返事のできる人間でありたい。子どもたちの前で、恥ずかしくない返事のできる人間でありたい。それが尊厳だ。それは日本人としての尊厳ではなく、一人の人間としての尊厳だ。その尊厳をまもるために、デモにゆく。何度でもゆく。(小熊 2013:59)

「内面的な行動によるこの生まれ変わりは、能動的な生き方の新たな源泉となることができる。」(ヤスパース 1946=2015:64) のである。そしてそのことにデモをすることの意味を見出し、自分の社会における役割を感じた人々がいた。

2-5-2-4 忘れないこと

「まだ事故は収束していない。」「最近、原発の報道はあんまりされなくなった。」「人も少なくなってしまった。」「原発があんまり争点になることもなくなった。」

2012年には官邸前・国会前を何十万人の人が埋め尽くし、異例とも言える形で総理大臣と反原連のメンバーの会談もなされ、実質的に原発の再稼働が停止している状態になったが、現在では再稼働が続き、福島第一原発の処理や放射線廃棄物の問題も解決されていないが、運動が2012年ほどの盛り上がりを見せるわけではない。そうした中で、運動参加者の中でも「疲れた」「毎週来てても、さらに悪い方向へと向かっている気がする」という声も聞こえ始めた。しかしながら、「ここに来るとまだまだ終わってない」ことを感じ、運動を続けようという気になる参加者も多い。

例えば、2017年3月末で福島から避難している人々の住宅支援が打ち切られる予定になっているが、現状では「まだ放射線量が高い」ことや「こちらで仕事や人間関係ができた」こと、「引越先が決まっていない」などで支援が打ち切られることと生活が困難になる人が多い。そうした人々は官邸前・国会前でスピーチや署名活動をしているのだが、その一人がキャンドルエリアに寄った際に、「みんなに支えられてるから、生きてこれた。ここにいる人たちがちゃんと反対してくれてるから、私うれしい。」と語った。それを聞いたキャンドルエリアのあるメンバーは、「安倍さんはアンダーコントロールとかいって東京オリンピックを招致したけど、全然福島の問題は終わってないし、そっちにお金を使って欲しいわ。でも〇〇さんのためにもやっぱり続けなきゃいけないわよね。」と語った。

実際に、福島から国会前に来る人もいれば、官邸前・国会前で出会った仲間などと福島へ行き、現状確認する人もいれば、原子力規制委員会を傍聴している人もいれば、院内集会に参加した人もいる。これらの人々のスピーチや活動を通じて、“原発問題”の現状を参加者は受け取り、活動が続けていかなければと思う。活動が続けていくことは、問題を忘れないことでもあるのだ。次から次へと新しい話題を見つけることでシステムを維持していこうとする政財界やマスメディアに抗うようにここでは、“原発問題”の新たな問題が参加者に突きつけられる。しかしながら、その範囲は限られたもので、「原発運動界」と呼ばれる「界」においてしか共有されにくいというもまた事実である。この点に関しては、運動に携わっている人々にも共有されている問題意識だが、本研究では指摘するだけにとどめておく。しかしながら、この「界」においては問題は再生産され続け、それが人々の運動への参加動機も再生産されるということは、重要な点であろう。

2-5-2-5 未来を作るために

官邸前・国会前の運動に関わっている人々の中には、日本社会が抱える構造的な問題に関心があると感じている人が多いということは前述した。反原連の服部は、

膨らむ社会保障費、公共事業中心の財政出動、もはや効かない金融政策と五五年体制型の政治を続けても屋台骨はもう崩壊しそうだ。いずれ立ちいかなくなることは誰の目にも明らかだろう。だから気づいた人から早く始めなければならない。気づいた時には手遅れとならないように。(服部 2016『現代思想』44:65)

と語り、“原発問題”だけではなく、日本社会があらゆる局面で問題を抱えていることを指摘している。現在のシステムの「屋台骨」が崩壊しそうだともまで指摘する。この感覚は参加者のリアリティでもあり、多くの理論や実証が明らかにしていることでもある。反原発運動に関わることは、ただただ原発に反対するというだけでなく、先行きの見えない日本社会のあり方を問い、異なる日本社会のあり方の担い手になっていこうとすることでもあるのだ。そして、「旧来の日本社会」を象徴するのが原子力発電所とそれを取り巻く構造なのである。官邸前・国会前での運動は、異なるあり方を探す運動でもある。本研究では、行為者のリアリティの問題を多く扱ってきたが、日本社会が直面する構造的な問題も運動には関わっており、そのことが行為者のリアリティにも密接に結びついているという点は詳細には扱わないが、述べておく必要がある。国会前エリアでゲリラ・カフェを営むいとうやすよは、

特定の政治イシューのために人々が広場や路上に長時間居座る時は、だんだんそこに、自律的な人間の生の営みが現れます。(中略) こういうのを見ると、そこに参加している人たちが作るうとする世界がどんな形をしているかが見えてくる。運動方針のすり合わせとは別に、一緒に生活空間を作っていくパートナーとして、お互いに距離を保ったり折り合いをつけたりしないといけなから、「革命後の世界」に具体性が出てくることになる。(いとう 2016『現代思想』44:67)

と述べる。官邸前・国会前も長い人々の相互作用の結果、自律的な営みが行われる〈場所〉が出来上がった。いままではあったことのない人々と出会い、共に活動し、今までに考えたこともないことを考えるようになった人々がいる。人々が〈場所〉を作り上げ、人々はその〈場所〉に作り上げられた。本研究では詳述していないが、ここでできたつながりから、地域での政治運動を始めた人もいる。それが近年の市民連合という動きにもつながってきている。官邸前・国会前を離れて、市民の運動は広がっていった。安保法案反対運動、辺野古基地反対運動、給付型奨学金を求める運動、待機児童解消を求める運動がこの〈場所〉で行われるようにもなった。その動きを生み出した一つの源流が、3.11以降に作り上げられた官邸前・国会前という〈場所〉であった。この〈場所〉は、日本の社会運動の一つのホームベースとなっていたのである。そして、それは、“原発問題”を機に、自らの日常の自明性を揺るがされ、そしてその日常を規定する社会構造へと目を向けた市民たちによって作り上げられた。参加者も述べるように現在運動の担い手は、「お年寄りばかり」「変化がなくなってきた」「このままでいいのか」という自己への問い返しもある。「何か新しいことをしなければならぬのではないか」という不安も共有されている。そういう問い返しや不安の中でも、人々は官邸前・国会前という自ら作り上げた〈場所〉を守り続け、「篝火」を灯し続けている。自らの志向に合わせた場所作りを極力排して、あらゆる人が自分の意見を表明するための「器」づくりに徹した反原連。そしてその「器」は多くのリアリティによって彩り豊かなものになり、そしてその「器」は未来を作る運動のための〈場所〉ともなっているのだ。トゥレーヌ(1980=1984)は、運動の予言的な役割を強調している。つまり、運動を行うことは、社会の異なるあり方を模索するものであり、それを実現していくということなのである。

3-1まとめと結論

本研究は、官邸前・国会前において〈場所〉が形成され、その〈場所〉を中心にして営まれる行為の諸相を明らかにしてきた。第1章では、その舞台を作り出している主催者について記述されている。第2章では、その舞台でそれぞれの活動をしている参加者たちが描写されている。それらはすべて人々の相互行為の蓄積によって成立していることもまた同時に明らかになった。空間を〈場所〉にしていく過程は様々な行為者によって担われる。その過程で現れてくる意味も多様であり、その意味の中で人々は生き、さらにはまた意味を変えていく。

一章では、担い手である反原連がどのように官邸前・国会前という空間を抗議のための場所にするために、意味的な区切りを導入しているか、そしてそれを担っている人々はどのような人々であり、彼ら/彼女らはどのような運動のあり方を目指しているかということ明らかにした。そこから見てきたのは、「器」というキーコンセプトである。主催者が「社会を変える」主体となり、大衆を組織化して、政治的目標を達成しようというよりはむしろ、主催者は主体となることを極力避けて、多くの人が自分の意見を表明するための「器」づくりに徹していることがわかる。そして、その「器」という官邸前・国会前という〈場所〉を象徴するコードは参加者も受け入れ、その中で様々な活動をしていることが2章で明らかになった。反原連は、直接抗議を志向したけれども、参加者の行為の蓄積によって、多様な表現が行われるようになり〈場所〉の意味が重層化した。そして、そうした行為はどのような人々あるいは集団によって担われているかを、キャンドルエリアを中心に考察した。ここでは、いわば舞台内舞台というミクロな視点から参加者の行為の諸相が明らかになった。続いて、官邸前・国会前という大きな舞台は全体としてどのような役割を果たしているかを明らかにした。ここでは、官邸前・国会前には「表現の場」「討議の場」「学びの場」「つながりの場」としての4つの機能的な役割が見られることが明らかになった。そして、最後には参加者がそうした場所にどのような意味づけをおこなっているのかというリアリティの諸相が明らかにした。

人間には世界開放性（シェーラー 1928=2012）があると言われている。世界開放性とは、自らの周りの環境を作り変えていく力のことである。近代社会の一つの特徴は、目的合理的な組織である。この目的合理的な組織が一つのシステム-体系を作っているのが、近代社会の大きな基盤であると言ってもいいだろう。このシステムは時に人間を手段的に扱う。肥大化した自己充足的なシステムは、いつの日か人間の手には負えない存在となっていく。人間が作り出したものに独自の生命が与えられ、人間がいつしかそれに縛られるようになる。原子力発電という産物もまたそうである。我々の時代の直面している無力感もまたこの肥大化した近代的なシステムを前にしての嘆息なのかもしれない。そうした現状を前にシニシズムに陥ることもある。あらゆる行為が問いの俎上に載せられ、一つとして自明なものはない。その問い返しの中でまた無力感を感じることもある。我々はあらゆることに対してその意味を説明しなければならず、あらゆる行為に対して「意味はあるのか？」と問われることになる。筆者は官邸前・国会前で行なわれているデモ（正確には「金曜官邸前抗議」はデモではないが便宜的にデモと呼ぶ）を研究しているという、露骨に距離を取られたり、「デモって叫んでるだけで意味あるの？」と問われることもしばしばあった。本研究はその一つの回答でもあると思う。「叫んでいるだけで意味あるの？」という問いは、「単純に叫んでるだけじゃ意味ないんじゃないの？」という問いと重ならずも遠くはないだろう。この問いは政治的な変革という目的を前提にすれば極めて合理的な問いである。そしてその意味でいうと、確かに言及した運動の担い手も述べるように「すぐには意味はない」と答えるしかないかもしれない。そしてまた、当事者たちも同様の問いを自らに突きつけている

本研究はそうした問いからは意図的に距離をとった。本研究が明らかにしようと努めたのは、意味が現れるその“現場”なのである。「意味があるの?」という問いへの筆者の回答は「意味は立ち現れる」ということである。筆者はその地平を描き出そうとした。

人間は自らの周りの世界を作り変えようと志向する。それはおそらく人間には近代の果実を食べて以来、言語と知恵を獲得してしまったからであろう。つまり、人間は言語と知恵によってこの世ならざる世界を描き出すことに成功した。「こうでなくてもいいのではないか。」「こうしたらいいのではないか。」それはおそらく言語なしにはあり得なかつただろう。しかし我々の住む社会は、いささか「こうでなくてもいいのではないか。」という違和感から、それを変えていくまでには距離がありすぎる。その結果、無力感に陥ることもまた多いのであるが、そうした無力感を抱えつつもなお、人々は世界を構築し、その世界に意味を付与することができるのだと思い、各々ができる範囲で自らの周りの環境を変えていくことができる。筆者はその“現場”を描き出そうと努めた。ハンナ・アレントは『人間の条件』(1958=1994)の中で、「活動」という概念を、人々が言葉によって、他者と交わることで、ある世界を始め、終わらせていくことと捉えた。ある世界を終わらせること、そしてある世界を始めること、それは人間によってのみ可能である。我々は、あるシステムの正当性の揺らぎに直面しており、どのような社会であれば合意できるのか、どのような生き方が“よい”のだろうかと模索している。それは一人一人が模索し、他者との対話を重ね、実践を積んでいくことでしか獲得はできない。

大きな政治構造はたかだか数百人の抗議では変わらないだろう。しかしながら、だからと言って意味がないと一蹴することもできない。意味は立ち現れるものであり、立ち現れた意味をすくうのが筆者の仕事だと考えた。そしてその意味は、一人一人が模索し、対話をかせね、実践を積んでいくことから生まれる。この世界に現れた意味は、日本社会を逆照射して我々の置かれている位置を明らかにし、そしてどのような道がありうるのかの一つの可能性を照らし出している。

3-2今後の課題

本研究の課題は数多く存在するが、ここでは2点を指摘しておく。1つは、内在的な問題である。本研究では、官邸前・国会前抗議が行われている〈場所〉がどのように成立しているかを明らかにしているが、2つの視点が抜け落ちていると考える。それは、その〈場所〉をメディアや政財界、言論界などいわば舞台の鑑賞者はどのように受け取ったのか、そしてそれに対して運動の内部はどのように自己提示を行い、それは運動の意味づけや行為にどのような影響を与えたのかという行為者と鑑賞者の相互作用については扱っていないという点である。社会運動の目的の1つは、問題を問題として認識させることであり、そのため行為者と鑑賞者の相互行為がどのようなものであるかは避けて通れない問題であるが、本研究では扱うことができなかった。もう1つは、〈場所〉から離れて広がる運動の諸相を明らかにしていないということである。例えば、反原連は官邸前・国会前以外にも街頭デモをおこなっているし、参加者の中にも官邸前・国会前でできたつながりを元に自らの地域で活動をしている人もいる。あるいは運動から離れていった人はどのように考えているのか、また参加者の中でも運動自体に対する問い返しなども起こっている。この点は、本研究では十分に扱いきれなかったため、運動の内部からの問い返しという側面に光が当てられていない。以上の2つの視点が抜け落ちているため、本研究は立体的に運動を扱うことができていない。

続いて、研究の外在的な問題も指摘しておく必要がある。本研究は、行為者がどのように〈場所〉を作り上げ、その〈場所〉にどのような意味を与えているかという、行為者を中心とする枠組みを採用しているため、主催者や参加者、運動自体をより大きな歴史的・社会的コンテクスにどのように位置付けることができるのかという点は扱っていない。社会運動は、社会変動の反映でもあり、ある条件のもとで生じるものである。それは、社会構造の変化、そしてその構造の変化

がどのように行為者に現象するかという点と無縁ではない。本研究では、その点についてはほとんど扱うことができてない。また、国際比較という観点も抜け落ちている。筆者は、近年の社会運動の特徴として、空間の占拠とその空間の「場所化」という傾向が見られるのではないかと冒頭で指摘したが、実際に国際的な近年の運動と比較する形で、官邸前・国会前における抗議活動を描いてはない。さらには、現在日本各地で行われているデモのあり方とも比較していない。いわば、官邸前・国会前における運動の内部の諸相を明らかにしたに過ぎないのである。本研究が、内在的にも外在的にも問題を抱えていることは明らかであり、その点に関しては修士課程においてさらに研究調査を進めていきたいと考える。

謝辞

本論文執筆にあたっては多くの人びとにお世話になった。まず本論文で用いた地図は、中村珠愛さんが協力してくれた。地図作成などが苦手な筆者にとっては、とても助かるものであった。また、普段よりいただいた激励の言葉の数々も励みとなった。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。ありがとう。

また、小熊英二研究会の皆さんにはお世話になった。皆さんとの実りのある対話は、筆者の問題意識をクリアにするとともに、不十分な点について考えさせるものであった。皆さんの研究からも得るものが多かった。皆さんの関心と研究は、筆者の視野を広げるものであった。また、毎回ゼミの後に行う食事会も楽しかった。ありがとう。これからもよろしく。

小熊英二研究会の先輩方にもお世話になった。皆さんが研究会で書き上げていった卒論を読んで、筆者は幾度となく激励されたものである。どの論文も、皆さんの熱意がこもっており、大変参考になった。また、個別に相談に乗ってくれたり、議論の相手になってくれたり、励ましてくれたりと、いい先輩ばかりで非常に恵まれていた。一人一人名前をあげたいところであるが、ここでは割愛させていただき、改めて連絡させていただきます。皆さんのおかげで大学生活は充実したものとなりました。ありがとうございました。今後ともよろしく願います。

秘密基地collegeのみんなにも感謝したい。思えば、みんなに会えたことが大学生活の転機であったかもしれない。夜を徹して話したり、議論をしたり、読書会をしたり、旅行にったり、食事会をしたり、一緒に何かしてみたりとたいへんお世話になった。みんなとともに活動したことから、多くのことを学ぶとともに多くのことを考えさせられた。ありがとう。これからもよろしく。

川島俊之さんには、斎藤慶典さんの現象学のゼミに誘っていただいたが、そこで学んだことはたいへん大きかった。気にかけてくれて、様々なお誘いをしていただき、大変感謝しています。ありがとうございました。

鈴木寛さんをはじめ、すずかんコミュニティにもお世話になった。鈴木さんの家で議論したことをはじめ、このコミュニティには様々な活動に精を出している人が多く、刺激を受けた。皆さんとの出会いもまた大学生活に欠かせないものであった。鈴木さんと夜遅くまで、多くのことを語り、かつ未来を考えることができたことは財産である。これからもよろしく願います。

本研究を指導してくださった小熊英二さんからは多くのことを学んだ。現代日本が直面している問題、そしてそれを解決していくにはどうするかということを経典から学ぶという作業を通して、得たものははかりしれない。また論文の指導に当たっても、筆者の関心を最大限に尊重する形でおかつ的確なアドバイスをしていただいた。大学で学ぶことができてよかったと思いつさらに研究を進めたいと思ったのは、小熊さんの警咳に接してである。ありがとうございました。今後ともご指導の方もよろしく願います。

そして何よりもこの論文に協力していただいたのは、「金曜官邸前抗議」に集まる人びとである。今年で活動も5年目を迎えるが、5年間も継続していることには敬意を表したい。その一方で、みなさんの活動を記すことによって、残したいとも思った。まだまだ述べられていないことばかりであり、不十分な点ばかりですが、引き続き自分にできることを継続していきたいと考えています。特にBEのみなさんには感謝しています。筆者をメンバーの一員として迎え入れてくれて、一緒にデモに参加したり、飲み会でお話したり、ホームパーティをやったりなど、共に活動できてよかったと思っています。これからも引き続きよろしくおねがいいたします。

最後に、家族に感謝したい。筆者は不自由なく、自分の好きなことをやらせてもらえる境遇にあったが、これはひとえに家族のお陰であった。本研究は大学での成果であり、これをもって感謝の気持ちとさせていたきたい。引き続き大学院でもこの研究を進めていきたいと思っている。これからも負担をかけることもありますが、よろしく願います。

他にも名前をあげることができなかった人びとも大勢いるが、他者との関わりの中で筆者の考えは彫琢されていった。本研究もそうしたものの蓄積の上にあることは間違いない。不出来な筆者を気にかけてくださった、みなさまにもこの場を借りて感謝申し上げたい。

研究は、個人作業のように思えるが、このように多くの人の助けを得て、はじめて完成することを身をもって体感した。問いは他者との対話から生まれてくるものであり、研究をしたいという動機も他者との交わりの中から出てくるものである。そして、そのような関係の網目の中に自分が存在し、研究をすることができるということは奇蹟的なことである。不出来な点、改善したい点ばかりであるが、終わりもなければ始まりもないため、一旦これで筆をおくことにする。

平成29年 1月22日 自宅にて

参考文献

- アーリー, ジョン, 1995=2003, 吉原直樹・大澤善信訳, 『場所を消費する』.
- アレント, ハンナ, 1958=1994, 志水速雄訳, 『人間の条件』 ちくま学芸文庫.
- いとうやすよ, 2016, 「あたらしい世界のためにパーティーを続けよう!」 『現代思想』 44:66-71
- 遠藤誉, 2015, 『香港バリケード』 明石書店.
- 大井赤亥, 2016, 「運動と政権を繋ぐ回路のために-社会運動と民主党政権との『連携』と『乖離』」 『現代思想』 44:84-95.
- 大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編, 2004, 『社会運動の社会学』 有斐閣.
- 小熊英二, 2012, 『社会を変えるには』 講談社現代新書.
- 編, 2013, 『原発を止める人々-3.11から官邸前まで』 文藝春秋.
- , 2013, 「盲点を探り当てた試行-3.11以後の諸運動の通史と分析」 小熊英二編, 2013, 『原発を止める人々-3.11から官邸前まで』 文藝春秋.
- , 2016, 「波が寄せれば岩は沈む-福島原発事故後における社会運動の社会的分析」 『現代思想』 44:206-233.
- オルソン, マンサー, 1965=1996, 依田博・森脇俊雅訳, 『集合行為論—公共財と集団理論』 ミネルヴァ書房.
- 開沼博, 2012, 『フクシマの正義—「日本の変わらなさ」との闘い』 幻冬社.
- 川北稔, 2004, 「社会問題を『発見』する社会運動—ラルフ・ネーダーによる欠陥自動車の告発運動」 大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編, 2004, 『社会運動の社会学』 有斐閣選書.
- ギデنز, アンソニー, 1990=1993, 松尾精文・小幡正敏訳, 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』 而立書房.
- , 1994=2002, 松尾靖文・立花隆介訳, 『右派・左派を超えて-ラディカルな政治の未来像』 而立書房.
- 木下ちがや, 2013, 「反原発デモはどのように展開したか」 小熊英二編, 2013, 『原発を止める人々-3.11から官邸前まで』 文藝春秋.
- 木下ちがや, 2016, 「共同意識と「神話」の再生-複合震災から五年」 『現代思想』 44:72-83.
- 金知榮, 2016, 「担い手はどこから現れたのか—活動のきっかけと団体形成過程」 町村敬志・佐藤圭一編, 2016, 『脱原発をめざす市民運動』 新曜社.
- グレーバー, デイヴィッド, 2013=2015, 木下ちがや・江上賢一郎・原民樹訳, 『デモクラシープロジェクト—オキュパイ運動・直接民主主義・集合的想像力』 航思社.
- 五野井郁夫, 2012, 『「デモ」とは何か-変貌する直接民主主義』 NHK出版.
- ゴフマン, エーヴィング, 1959=1974, 石黒毅訳 『行為と演技—日常生活における自己呈示』 誠信書房.
- , 1963=1980, 丸木恵祐・本名信行訳 『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』 誠信書房.
- シェラー, マックス, 1928=2012, 木田元訳, 『宇宙における人間の地位』 白水社.
- ストロース, クロード=レヴィ, 1962=1976, 大橋保夫訳, 『野生の思考』 みすず書房.
- スメルサー, ニール, 1962=1973, 会田彰, 『集合行動の理論』 誠信書房.
- 辰巳智行, 2016, 「市民活動の空間と時間—地理的分布と時間的推移」 町村敬志・佐藤圭一編, 2016, 『脱原発をめざす市民運動』 新曜社.
- 田村貴紀・田村大有, 2016, 『路上の身体・ネットの情動—3.11後の新しい社会運動:反原発、反差別、そしてSEALDs』 青灯社.
- タロー, シドニー, 1998=2006, 大畑裕嗣訳, 『社会運動の力—集合行為の比較社会学』 彩流社.
- トゥアン, イーファー, 1977=1988, 山本浩訳 『空間の経験—身体から都市へ』 ちくま学芸文庫.

トゥレーヌ,アラン,1978=83,梶田孝道訳『声とまなざし—社会運動の社会学』新泉社.
 —,1980=1984,伊藤るり訳,『反原子力運動の社会学—未来を予言する人々』新泉社.
 富永京子,2016,『社会運動のサブカルチャー化—G8サミット抗議行動の経験分析』せりか書房.
 野間易通,2012,『金曜官邸前抗議』河出書房新社.
 ハーヴェイ,デヴィッド,2012=2013,森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳『反乱する都市—資本のアーバナイゼーションと都市の再創造』作品社.
 —,1989=1999,吉原直樹監訳,『ポストモダニティの条件』青木書店.
 長谷川公一,1985,「社会運動の政治社会学—資源動員論の意義と課題」『思想』737:126-157.
 パットナム,ロバート,2000=2006,柴内康文訳,『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.
 服部至道,2016,「火を守り、場を温める」『現代思想』44:56-65
 ハーバマス,ユルゲン,1981=1985,藤沢賢一郎・岩倉正博・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎訳,『コミュニケーション的行為の理論 中』未来社.
 —,1961=1994,細谷貞雄・山田正行訳,『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求』未来社.
 濱西栄司,2016,『トゥレーヌ社会学と新しい社会運動理論』新泉社.
 ベッカー,ハワード,1963=2011,村上直之訳,『アウトサイダーズ—ラベリングリロン再考』現代人文社.
 ベック,ウルリヒ,東廉・伊藤美登里訳,1986=1998,『危険社会-新しい近代への道』,法政大学出版局.
 ブルーマー,ハーバート,1969=1991,後藤将之訳,『シンボリック相互作用論:パースペクティブと方法』勁草書房.
 ブルデュエ,ピエール,1980=1988,今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳,『実戦感覚』みすず書房.
 町村敬志・佐藤圭一編,2016,『脱原発をめざす市民運動』新曜社.
 マッカーシー,ジョン・ゾールド,メイヤー,1977=1989,片桐新自訳「社会運動の合理的理論」塩原勉編『資源動員と組織戦略—運動論の新パラダイム』新曜社,22-58.
 松本哉・二木信編著,2008,『素人の乱』河出書房新社.
 ミサオ,レッドウルフ,2013,『直接行動の力「首相官邸前抗議」』クレヨンハウス.
 メルッチ,アルベルト,1989=1997,山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.
 毛利嘉孝,2009,『ストリートの思想』日本放送出版協会.
 ルフェーブル,アンリ,1968=2011,森本和夫訳,『都市への権利』ちくま学芸文庫.
 ルーマン,ニクラス,2013,徳安彰訳『プロテスト-システム理論と社会運動』新泉社.
 ヤスパース,カール,1946=2015,橋本文夫訳『われわれの戦争責任について』ちくま学芸文庫.
 渡邊太,2012,『愛とユーモアの社会運動論—末期資本主義を生きるために』北大路書房.
 Alice,Mattoni,2014”The Potentials of Grounded Theory in the Study of Social Movements,”Della,Porta ed.,Methodological Practices in Social Movement Research,Oxford:Oxford University Press,21-42.
 Giddens,Anthony,and W.Sutton,Philip,2013,Sociology,Cambridge:Polity Press.
 Kathleen,M.Blee,and Berta Taylor,2002,”Semi-Structured Interviewing in Social Movement Research,”Bert,Klandermans and Suzanne,Staggenborg eds.,METHODS OF SOCIAL MOVEMENT RESEARCH,Minneapolis:University of Minnesota Press,92-117.

TwitNoNukes編著,2011,『デモいこ!』河出書房新社.

参考HP

IMA HP<http://www.intrepidmodeladventures.com/home/about-us-2/> 2016/12/17閲覧

日本山妙法寺 HP <http://nipponzanmyohoji.net/> 2016/07/18 閲覧

「保育園落ちた日本死ね」のブログ<http://anond.hatelabo.jp/20160215171759> 2017/1/15
閲覧

首都圏反原発連合 HP<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=5853> 2016/12/14閲覧